



093985-001-2

特9-903

自由結婚

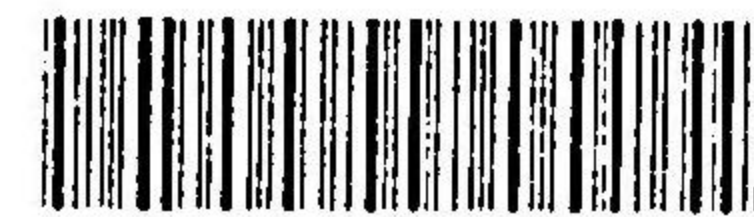
徳田 秋聲

三島 霜川 / 著

前

M35

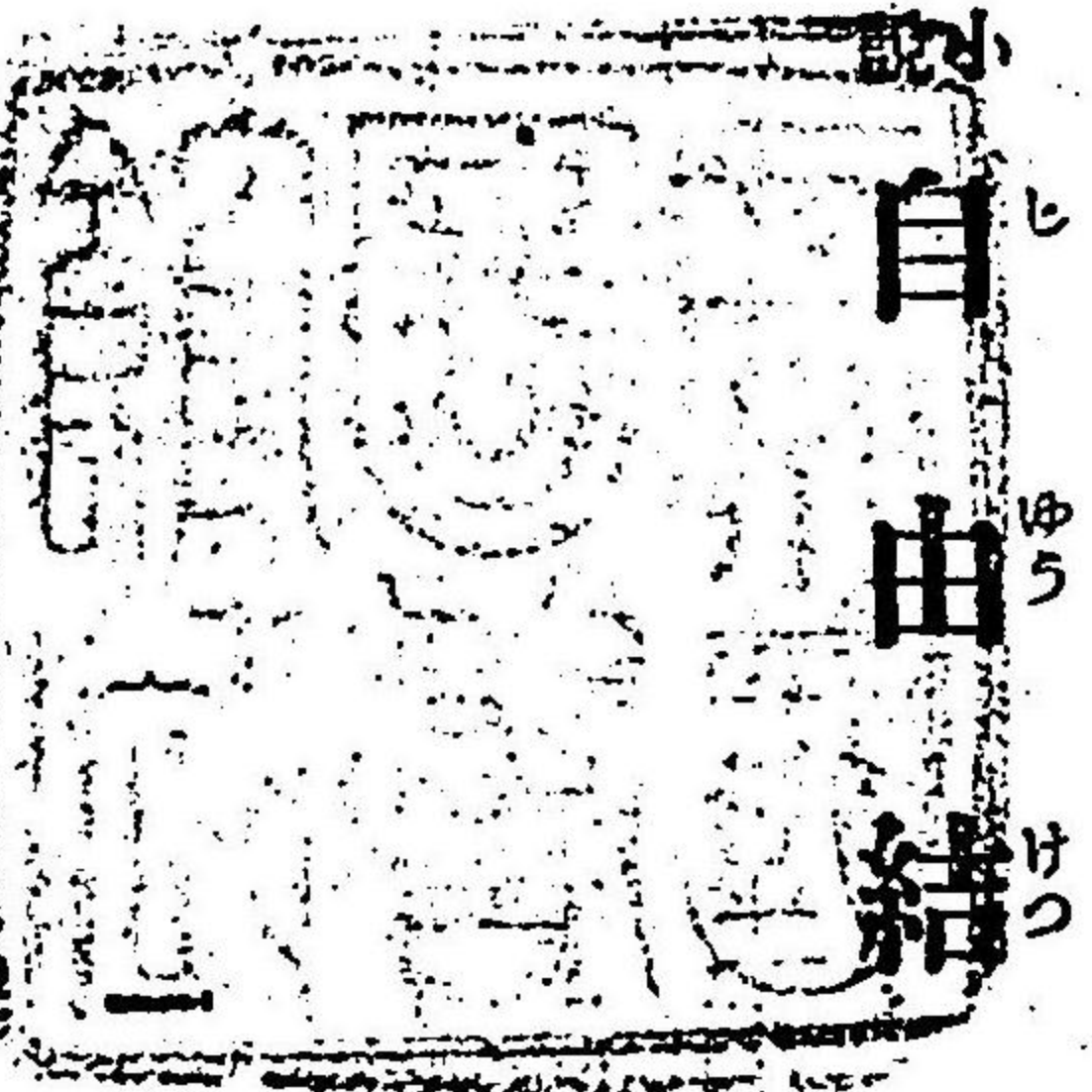
DBQ-1424





特9
903

自由結婚



婚

徳田秋聲
三島霜川

合著



「ぢや阿母さん、妾あはれ何うすれば可いんですの……妾あはれ眞箇
に困つて了ふわ。可厭になつて了ふぢやありませんか。」
と然も憤れつたさうに謂つて、管で頭を掻きながら唇を尖ら
して、聲に濕を有たせて居るのは、年の頃二十を一つ二つば
かり越した……かとも思はれる女であつた、夏——と謂つて
も卯月の頃。

椽頭には櫛の、若葉がさら／＼と日光に射られて、影は翻然
 と手洗鉢の水の面に映いて居た。散残つた八重櫻の色は褪め
 て、落花に大地の一箇所は白く環取られたやうになつてゐた
 女は節糸織の袷の上に較古びた縞のお召縮緬の羽織を引掛け
 赤入花模様の唐縮緬と縞子の晝夜帯の間に、ふつさりとした
 淡紅色縮緬の帯上げを見せて、全てが若作り。一体が小柄な
 體格で漆のやうな黒髪は銀杏返しとかいふのに結つてゐた。
 やゝ紊れかゝつた髪のは、一ふさばかり、はらりと櫻色を
 した頬に亂れて居た。朱の唇は薄く、屹と結んだ点に無限の
 怨を有つて、黒眼勝の目のうちには何時か曇りがかこつて居た
 阿母さんといふは四十餘りの、上品な隠居風。頭髪は切下げ
 髪とかいふのであつた。何やら縫物の手を休めて膝に散つた
 糸屑を拂ひながら、

「何とも怠うも無いぢやありませんか、ね。私の謂ふ通にお
 仕ならば……斯うなんだね、可いかな。彼方からお迎にお
 在有なさるまで待つんだ……お前其が出来ないと謂つ
 てお在有だし、然もなきや別に好い思案と謂つても無いや
 うだがね……實に阿母さんも當惑して居ますのさ。」
 「だけと阿母さん、能つくお手紙を見て下さいませ。他に
 好い思案も無いやうぢや、妾あ、妾あま何うしませう。他に
 眞箇につまらないのね。ぢや斯のまま破談にして丁ふんで
 すの……然うなんですか。」
 と手許に落散つた紅絹の片をみり／＼と引裂いて、齒切して
 俯首になつて了ふ。母は眼を圓くして……呆氣に取られる、
 「お今や、お前ま何をお爲なんだね。」
 お今ははつと我に返つて隠顯に莞爾して、

「だつて……。」

と甘めて見せる其の邪氣の無い舉動に、

「だつても無いものだ。」

と母も眉を翹めて、耐力も無く笑面になる。

少時経つてから

「ちよいと……ちよいとッ。」

突如にお今は齒痒さうに呼掛けて、

「ねね阿母さん、ねね——お手紙の様子ぢや何んでも今のこと

ころでは商賣の方が大變にお忙いもんだから、到底此方

まで出向く譯に行かない。あの、そいで、約束通りにしや

うと謂ふのなら、妾の方から出向いて與れるやうにつてね

然うすりや吃度約束は反古にしましよ、とね、斯うなんで

せう斯う有仰るのでございませう。然うすると、妾の方か

ら行かないとなりや、十年経つても百年経つても駄目です

わ……不縁になるに定つて居ます。足掛六年も待つて居て

今更そんな事になつては、妾の眞箇につまらないわ、眞箇

よ。」

と處女らしい駄々を捏ねて居る。眼の内には疾や一杯に涙を

溜めて居た。

「然うさね。」

と、母も心から當惑して居るらしく、

「お前だつて子供といふのぢやなし、疾く縁について與で

ないよ、そりや私も心配でね、お前が思つてお在有よか、

十倍も二十倍も氣は急くのだけれども、速い箇所へ行くん

だから、お前一入ぢや危険だし、と謂つてね、私がついて

行くの、誰かを付けて與ると謂つては、面倒だし……面倒

ばかりか容易な事ぢやなし……阿母さんも眞箇に思案に餘

つて居るのだよ。其ともか前まわ、何んか考へた事がある
のなら、隠さずとね、謂つて御覽。」

お今は忸怩しながら、頓に返事を爲得なかつたが夏刻して、

「阿母さん……。」

と言鋭く呼掛けて屹となる。

「ねね」

と言惱んで居て、

「此の上にも三年も五年も待つて居ちや甚廢事になるか、知り
やしませんわ。だから……。」

と謂つて母の面を見る。

「何うお爲だ？……思切つて了ふ氣にでもおなりかぬ。」

と何んとなく冷に問反して、じろりと娘の横面を睨めた——

底意ありげに——、お今は頓着なしに、

「何んだつて、まわ——何んだつて思切るものですか……阿母

母さんでは無情。」

「では？……何う爲るのさ。」

と母の聲は鋭くなる。

「あら！もう慍つてお在有なんだもの……だから妾何んにも

謂やしないの。」

「慍つても居ないんだが、ついね、思案に倦むもんだから。」

と改めて呼掛ける。

「何んだね。」

「妾斯うしやうかと思ふの、何うしても健三様が来てお與ん

なさらけや、妾一人で行かうと思ふの……關まはないわ、

一心ですもの、何が心配なことも怖いこともあるものです

か。」

と謂つて氣遣はしうに母の氣色を覗つた、有繫に胸が跳つたのか、面の色は、はうと紅を潮して居た。母は默然として居た。

二

母なるお絹は、思つたより驚いた氣色、憫れた學止も見なかつた。が唯一人の一粒種の愛兒をば手離して、一人旅に上せん事の憂慮はしさに、且は浮世知らぬ娘が大膽なる決心に心躍りて、我を忘れて少時は恍然と娘の面を睨めて居た。「お前の然う思窮めてお在有たのも道理だけれども、まあ考へ

ても御覽な、健三様こそ知つてお在有だけれども、お前様では、磯川のお兩親なり御兄妹はだよ。お前といふものに一度だつてお逢ひなすつた事がないのだから、わざと出掛けて行つて、何様間違が出来るか知りやしません。悪くすると御兩親や何かの方に故障があつてさ、お前を嫁にされないで御出されて御覽、可い恥晒しぢやないか。其段になるど馬鹿を見るのはお前ばかりだよ、妾あ、其が口惜しいわ。萬一また、お前の身に難癖がついて御覽、妾あ阿父さんの位牌に濟みません。はい。だから輕率な事は爲ないで、お前能つく考へてね、親の無い子だ！、あれ見る！と世間の後指をさへれないやうに爲てお興れ、ね後生だから。」
「ですけどね、阿母さん、妾あ然う思つて居ますの、他の人

は何うだつて聞やしませんわ、ね、然うぢやありませんか
健三様さへ六年前のお今だと思つて居て下さりや、そいで可
いことよ。加之お手紙の様子で見ると、妾あ大丈夫だと思
ひますの。
とお今の言には力が籠つて居る。

「然うか、」
と母は危んで居る、

「然うですとも。」
と、お今は斷乎と謂放つて、其の面には疾や動かすべからざ
る決心の色が見られた母は娘の雄々しさに心動きて、頃刻言
もなかつたが、吁、思へばいじらしの娘、と漫に我と我
に繰返される愚痴。夫となるべき健三にもし信あらば、花は
漸く盛りの色の褪せぬ間に、迎にとて來べき筈であるのに、こ

も什麼なる思慮が其處には潜むのであらう？、何時も何時も
文の音信に陸まじさは見すれど、何うやら一寸脱れの申譯ら
しくもある誠の無い仕向け。無垢の娘に斯ばかり知らぬ面の
面憎さ。娘が思ふ千に一つなと思つて與れさうなもの、娘が
誠心の曉の夢になりと健三に通じたらば、と愚に返つた親
心の、娘の焦れて居る程にも無い健三の薄情が、怨めしくて
怨めしくてならぬのであるが、親は思へど子は更に……目前
か今が親をも家をも振り捨て、健三の許へ行かんといふに、
久しく娘よ母よと呼交して、如何なる事あらんも、膝下をば
放すまじと夢みし娘の、疾や此の家を見捨て去るやうに覺
て、老の胸のたゞ涙に塞がるのであつた。

「お前は然う謂つてお在有だけど、女の身で一人旅なんても
のは出来るものぢやありません……能く魔が魅したりなぞ

してね。」

「何ッ魔が？……。」

とお今は何か知らず愕然とする。

「然うさ、魔さ——。」

と母の言は不思議に落着いて居た。

「魔とは阿母さん………什麼物なの………妾知らないわ。」

「魔とはね。」

と母は有繋に返事に窮つたが、早速に轉じ變へて、

「人の弱味へつけ入つて種々に酷い目に逢はせるものさ。

そいでお前のやうな世間不見はね、其の魔に攫まると、知

らず知らず深味へはまつて、とんだ難義をしますのさ。」

「へい、其様物が居ますの、常節でも。」

と、二十は越したとはいふものゝ、お今は實に浮世の塵に染

まぬ深山の奥の奥の山櫻………と謂つたやうなものであつた。

「そりや澤山居ますね、掃摸だとかぼん引だとか、女仕入だ

とか。」

「其様物が何が怖いのですか。額が人でせう。」

「其の人がさ、お前怖いのだよ。其にまあ、臆面の無いとこ

を謂ふと、斯うさ。第一怖いのは健三さんさ。」

「何ッ。」

「どいふのは可いかに、何んだつてお前六年以前のお知已ぢ

やないか。其の時こそ出世したら、貰つてお嫁にするなん

て謂つて在有つしつたが、當世の方だもの、今ぢや何うお

心が變つて居るか知れたものぢやないよ。いゝねさ、餘り

邪推り過ぎるやうだけれども那の時分はお前も十五か六で、

お庭の那の柿の木が、まだ是許しきやなかつた時だもの、

お伶俐な……妾お其のお伶俐過ぎたのが嫌だつたけども、
お伶俐でね、優しいやうで、お前なんぞが好きさうな方だ
つたけど、今ぢや悉皆大きくお成んなすつて、お前の嫌な
處まで生じて、甚廢に怖い方になつてゐるか知れやしない。
お前往昔の健三さんだと思つて行くどね大間違だよ——甚
廢間違出来るか知れやしない。」

と、其の心を翻へさんどでは無いが、お絹は意にも無い事を
で駈べて、娘の意氣組を挫かうとする。

「可厭な阿母さん、誰だつて大きくなりや罷も生ねませうぢ
やありませんか、何も那樣に悪く有仰らないでもの事です
ね。其に設六年経たうが十年経たうが、心のお變んなさる
やうな健三さんぢやありません。」
「其はまあ、然うだらうけども。」

と、極悪さうに血汐さつと上らしたお今の横面を眺めて、
「何うか然うなりや實に結構だがね、お前眞箇に輕率な事を
爲るんぢやありませんよ、能つく考へてね魔が魅さないや
うにね、可いかな。ま、ま、其よかお前斯の積を絆けてお
與れな。」

と、謂へど、お今は放心とした面で、庭の若葉を眺めて餘念
が無い。かとも思はるゝ眼の裡には涙が一杯に溢れて……
に傳つて……はらくと縫物の上には亂れ落ちた。

磯川の一家が尙だ田舎に居た頃であつた。健三といふのは十
 五六の少年で、お今は振分髪（おんげ）の幼い女であつた。故あつて磯
 川の一家が東京に引移つて、今の如（ごと）に盛大になつて、幾箇所
 かに商店を有つて、手廣く商業を營（か）むやうになつてからは、
 健三の身體は脆弱（けんぞう）く、動もすれば學業に就くべき望（のぞ）さへ斷ゆ
 るに、東京の塵埃（ちんがい）に塗れて、愈々健康を損ねん事を恐れて、
 お今等が住へる町に世帯を持つ健三が乳母の家に、養育費若
 干金を支給して、二十になるまでの期限で預け置かるゝ事
 となつた。親よりも親しみ厚かりし乳母は、悦んで健三を家
 に迎へて、萬事に意を用ゐて懇に介抱して、事もなく月日を
 送つて居たのである。が、漸々と期限に近づいて來ると、健
 三は思つたより健康な體になつて、來ん年は久しく相見ざる
 親双兄弟の待るる東京に行かんと思し居たりし折から、圖

夫

らすお今と相思ふわいなき間とはなつた。
 若き男と若き女との、壁へば野邊の下萌にも似たらん戀は、
 當初（おんはつ）に嚴格なる乳母が見張の眼にも入らず、氣遣深きお今が
 母の聴き耳にも入らず、最と忍びやかに、最と微（か）けく、迷の
 胸（むね）にうち秘（ひ）られてあつたのである。が、事あれかし鋭の眼に
 夕（ゆふ）の團樂の語草（くわさ）発見さんと勉めつゝある世間の眼の瞬ましや
 うは無くして、二人の問何時かあて推量の世間の口に登つて、
 或は町盡頭を流るゝ小川の堤傳（ついでん）に、柳の下に二人が物思はし
 げに歩むを見たりと謂ふ者あり、或は健三が乳母の留守に、
 お今を招きて樂しげなる笑聲の、小窓より洩來たと謂（い）ひす者
 もあり、又は淋しき夕問暮に、健三がお今の間近を往きつ戻
 りつ、去り兼ねる様にて行めるを認めたりと語る者さへあつ
 た。

斯くて性來快活なる健三は、世間の口蒼蠅しとばかり、柔し
き乳母とも談合の上、お今が家に出入して、母なるお絹と親
しみて、争で行末かけて夫婦の盟を許し玉はずやと、思切つ
た面色にて説出した事もあり、其の時はお絹はたゞ微笑て、
お今の身に取りては、誠に望難き縁にはあれど、御身にどて
父母在すものなれば、容易くは許し玉ふ事あるまじと、軽く
流せば、健三は躍超となりて、若し父母許さずば我は家をも
財産をも打捨て、再此の地へ道れ来て、乳母が家に果敢な
き其の日を送らんまでのことよし然れど願うて許さる事は
よもあらじとて、其の眞顔なるが、可笑しかりしと、後にお
絹は笑つて居た。其の頃よりして、二人が戀に暖さの加はつ
て、愈々希望の光を放ちて、始後指さした世間の、おやつ
かい屋も、纏ては健三の眞心を感じて、果は近所の美しき評

六

判とはなつた。が、健三は一日、お今を近き森蔭へ誘ひ行き
て、語りけるは、御身だに志堅き戀ならば、我は必らず御身
を迎ふるの日あるべし、奈何に五年の星霜を経るまで、信を
我に繋け玉はずや。また久しく言はで、迷の胸にのみ苦しむ
べき戀にしあらねば、我は明るる年東京に行きて父母の許を
受くべし。と。聞くお今は唯怨りしげに眼を盈らすのみであ
つた。
然れば東京に出でける後も、健三が心籠めたる書信は
六年経つた今も變らず、何時もお今が胸に新らしく響きて、
魂は早や其方の空に憧れ出づるのであつた。

×
×
×
×
×
×
×
×
×
×

お今母子が受取つた健三の最近の手紙では、目下は止むなき
用事に追はるゝ身の、迎に行かん事の、なかくに覺束なけ
れば、遠き處にもあらず、殊に瀛車の旅なれば聊も危険なる
旅路なれば、一人にても輒く來らるべし、來ん覺悟となら
ば兎にも角にも身一つにて上京せられたく。

どこを筆を止めあつた。
お今は餘りの無雜作と冷談に憫れはしたものの、飽くまでも自
分が勝手な理屈をつけて、健三が性質に照らして見れば、然
して異ひべきでは無い。と思返しながらも、猶も心を決し兼
て、四分の疑懼もお今が狭き胸に蟠りもしたが、健三が面を
見ん日を樂に、思はしき疑をかき拂ひて、母を見棄て家を去
る悲しみも、一人旅の心細さも念はでひたすら上京を急が
ものど、遂には母をも納得さして了つたので。

可憐しきお今は、渠女が行途に待伏する種々の悪魔——其の
悪魔が爲する苦勞や艱難を夢にも思はで、たゞ健三に一日な
りと早く逢はんものと跪いたのである、急躁つて居たのであ
る。

四

卯月の二十日餘り、橋端には花桶の匂ひひて、山杜鵑天の一方
何處からか落ち來る頃、お今はいよく旅路に上る事となつ
た。
打扮は、人目を惹かん事を慮れて、力めて滋味なるを撰びて

然まで豊かならざる活計に、母の心盡しに成つた吾妻ユート

ど、お高祖頭巾に身を固められた。

「お今や、妾あ何んだか夢でも見て居るやうでね、お前の行

くのが本統にならないやうな気がするよ。」

ど、母は涙を拭ひもあへず、打濡つて、襟の揃はぬのなを

整して與つて居る。

「真箇にね、妾も何んだか……もうく可厭な心地がして……

だけ心配して下さらないだつて……あの心配なんかせず

に、心丈夫に思つて居て下さいよ。そして何よりかまあ、

體を大事にして病はないやうにね、可うございませうか、阿

母さん、我儘ばかり謂つて真箇にね、阿母さん、妾あ我儘

なのよ。先方へ行つたら直に手紙を送しますから、阿母さ

んも時々ね……。」

ど、しどろもどろ。今更のやうに聲曇らして、何か用意に取

紛らしては、胸の切なさを忍んで居る。

「何にね、何うせ行かなくつちやならないやうなら、一日も

早く片付くのは、そりやね、芽出度のだけども、謂はゞ一

生の大事なのに、這麼手軽な事では何んだか心が濟まない

やうでね……いゝねさ役目が濟まないで、妾等の心配の荷

どいふものは、尙だ下りて了はないやうな気がしますのさ

何うか、まわね、妾の思つてる事が悉皆取越苦勞になつて

了へば可いがね。」

お今は何か胸頭を挫られるやうな気がして、

「阿母さんてば、縁起でも無い事はつかり……妾あ心細くな

つて了ふぢやございませんか。」

「いゝねね、お今、然う謂つたもんでもないよ……人には蟲

「知らすといふ事があるものだが。」

「さ、人が能く謂ふね、蟲が知らす！ツてね、妾あ何んだか其様心地がして為様がないの。何うかまわ、無事にお前の願望が届いて與れれば可いがね。」

「大丈夫よ、阿母さん。」

「お前は氣が立ッてるから然う云ッてお在りだけども。」

「だッて阿母さんも餘り苦勞性だわ。」

「いゝね、然うぢやないよ、好事魔多しツてね、人といふものは幸になりかゝるとね、種々な故障が起て來ては、ついでに何時も不運で居る者だよ。」

「然うばかり限つたものですか。」

「でも妾あ何んだか胸喉がしてね。」

「でも妾あ何んだか胸喉がしてね。」

「嫌だ！、母さんは、もう。」

「ど、お今は深くも氣に懸ぬらしく、母の憂慮をば所以も無く打消して」

「妾あ、また、阿母さんの事が心配でね、妾が東京へ行つて」

「了へば嘸淋しからうと、思ふといね……。」

「妾の心配してお與れでないよ。お前が發足つて了つた後は」

「家を疊んでね、伯父様と一所になる目算だが些とだッて淋しい事はありやしない。本來を謂ふと妾が送つて行く筈なんだけども、然うも行かすさ、妾あ實に不安心でならないのだよ。」

「否、眞箇阿母さんよ、妾だつて是だけに育つて居るのだもの、豈勝扱されるやうな事もあるまいし、東京へ着きさへすりや健三様が在りしやるし、那處心配はなさいでもの事」

ですわ。」

「お前は眞箇に暢氣だよ。だから妾あ猶心配でならないの。赤子で育つて来たんだから、何んでも正直に聞いて、其のうらを潜つて掛引する事を些ども知つてお在でないから、うつかり人の口車にも乗つてお了ひだらうし、何様人でも優しい聲さへ掛けてお興んなされば親切だと思つてお了ひだらうし。」

「もう可くてよ、澤山だわ阿母さん。」

母は尙だ何やら謂はうとして居ると、荷物だけ積まして向刻から門口に待たしてあつた車夫が、入口から趨然と面を出して、

「大分お手間が取れますな。お支度は未ですか。早く成さらないと、今度の漕車には間に合ひませんよ。」

此の場合に、車夫の聲が、母親の耳には奈何に意地悪く聞かれたらう。お今は突と起つて、

「ぢや阿母さん、お健固でね、車が待つて居ますから、妾あ餘々出掛けます。今度の漕車に乗りかゝれては明日の間に東京へ着かれない勘定になりますから。」

「那樣に急がないだつて可いぢやないか。何んだつて那樣に男のやうに氣が強いんだらう。」

「だつて何時まで斯して居たつて同じですもの。」
口には謂へど、有繫に振切り兼ねて、面眩びに首を垂れた。

「では最うお起か、道中は氣を着けてね、可いかな、決して何様人にも氣を宥してならないよ。」
「阿母さん。」

「何んだね。」
「真箇に體を大事にして下さいよ。」

「あ、あ！お前もね。」

と新調の蝙蝠傘を手渡して

「雨でも降らなきや可いが。」

「雨？、まあ斯様可い天氣なのに。」

と笑に紛らしながらお今は漸々と門を出て車に乗った。棍棒

は容赦なく持上げられて、車上の人は見返る眼の涙に曇つて

見送る人は嗚咽げて、涙打かみしが、折から名残の花は、擦

亂と風に連れて、五片六片無心に兩人の間に散亂つた。

二町ばかりも駈出してから、お今はふつと後方を顧背いて見

ると、斜になつた町の中央——我が家の門に——、悄然した

味の姿が見えたので、お今は耐らず手巾で面を隠して、ふ。

よ、と泣出して

「お、車夫さん待つてお與れよ——。」

一度は後へ引返さうかと思つたお今は、何が何やら一切夢
中、ふつと我に返つた時は、急立つる驛夫に助けられて、既
に列車の一室に押籠められて居た。ばたん、扉が閉つて、笛
が鳴ると、纏て涼車は動き出す。疾や下車やうにも下車られ
ぬ事となつて了つた。其が何んもなく情ないやうな氣もせら
れて、お今はよろ／＼と起つて、窓から首を出して、凝如と

我が家の方角を眺めた。が、家どころか、住馴れた町さへも
とある山の陰になつて、山は夕霞に籠められて、其さへ塵にな
つて見ゆる。

西の空には、夕映が燃えて、真赤になつて、澄波つた空を、
わが町の方へ、鳥が二三羽飛んで行く。其の鳥の影を、我
が家の縁の上で母様も見て居られはせまいか？。と、お今は
頻に悲を覺えて、

「呀！、再び彼の山を越す事があらうか。母様のお面は何時
見られる事であらう。」
と憶出すと、涙は何時か頬に傳はる。

「せめて山の影なりと熟と見て置かう。」
と思つて居る間、涼車は、とある林へ入つて、大曲に曲つて
掘削を一箇所を越したかと思ふと、ひろくとした野へ出て

彼の山は既う見なくなつて了つた。

野は一ばいに夕日が溢れて、うつすりと霞が柳引いて居た。
次の驛へ來ると、其處では洋燈が點されて、ぼんやりした火
影は微に人と人との面を照して、列車内は暗澹として居た。

お今は唯心細さが増すばかりで、漫に母に謂はれた一言々々
が憶出される。
殆ど夢路を辿る心地で、恐ろしい事、忘はしい事、惨しい事、
悲しい事など、引續いて小さな胸を掠めて起つたが、其の間
に忘れて……、其等の忘想は消えて了つて、更に描き出され

たのは、東京へ着いた時の光景。まづ立派な紳士になり濟ま
した健三が、數多の群集の中に立って、われを迎ふるが眼の
前に縹々として、胸は坐に動氣に噪ぎ出す。と、女は早く老け
るものとか謂へば、健三に眼には我が田舎姿の、什麼に賤び

て野暮らしく見ゆるのであらう。もしや愛想を盡かされまいか。健三様は都の美目好き女に馴れて在す筈なれば。と女心の、到底も無く其から其へと妄想を走らして、樂なやら憂慮なやら、悦しいやら悲しいやら、腹の底の底の方での騒動は、お今は生て以來覺ぬ混雑であつた。

其の間に考へ疲れて、とろくと睡んで、折々物の音に驚かされて眼を覺まして、また耐力も無く睡って、また覺めて、お今は夢幻の間に一夜を明して、さつと我に返って、はつきりと眼の覺めて了つた時に……、恰も窓外に聲があつた。

「静岡、静岡」

見ると、窓外は夜は曉の、しらくと明味があつた。心地は爽快として、自分も夜の明けたかの心地で、お今は獨樂附した。見廻すと、列車内には十五六人の人が乗込んで居

て、呷するもの、伸をするもの、煙草を吸ふもの、饒舌つて居るもの、昨日乗合した初めの面とは大方一變して了つて、人数さへ十一ばかりに減つて居たので、お今は心密かに其の不思議さに驚歎した。

お今の傍には、何時の間にか、六十路餘りの煙が腰を掛けて居たが、

「もし、尙だ明方は寒い事でございませぬね。」

と聲を掛けた。東京者かとも思はるゝ言調で、姐は向刻より仔細ありげにつらくと、お今の態に目を注げて居たのであつた。

「左様でございませぬね。」

「何處まで行ッしやいませので。」

「東京まで参ります。」

「左様で在有ッしやいますか。お單獨？」

三四

「は。」

「東京は何處まで行きなされるんでがすね。」
其の聲は、他の方面から來たので、お今は慌忙と、其の方
へ頭を向けると、聲の主といふは、黒の中折の帽子を被ッて
同じ色の二重外套に身を固めて、のめりの駒下駄に白足袋を
履いて、白縮緬の編袴の袖をちらと見ゆる。外套をはねると
古渡唐機の意氣がツた羽織の縞が見えて黒八丈の前垂かけ、
見たところ大商店の主人も見ゆる人柄であつた。年は三十
ばかりでもあらうか、鼻隆く、唇赧く、頬の肉ふツくりとし
て眉毛濃に、色白で面長で、眼はぱつちりと温雅した優しい
やうではあるが、ともすると、不思議に底光がして慄然とす
る程鋭くなる。而して左の頬には目立つて大きな黒丸子があ

つた。

「日本橋でございます。」

と、お今の答は至つて低かつた。

「何處ですと。」

と、男は耳を傾けて問返した。其の横面を凝は屹と睨めるや
うにして「へん、二才奴。巧く持掛けやがるせ、黙つて手腕
を拜見しやうか。何方が手腕がある一ツ手腕競と出掛けや
か。たゞ見て居るのも藝が無ねの。」
と獨言いた。
併し其の聲は、誰の耳にも入らなかつた。

三五

「日本橋でございます。」
 と、お今の謂ふ間遅しと、媼は素早く引手繰つて
 「へい！、日本橋でございますか。日本橋は何方で在りま
 す。」
 商人体の男は、媼の腹の底の底まで覗き込んで與れるといふ面
 で、じろり媼の様子を眺めて、而して微かに肩を揺つて冷笑つ
 た。
 お今は其等暗々の間に行はるゝ兩人が紛紜は些とも氣が付か
 ず、
 「室町でございます。」

「室町？……室町は何家様で。」
 と、媼は兩膝に唇を突いて、お今の面を覗き込ひやうにして
 訊ね出す調子の好ま。
 うつかり乗つて、
 「磯川と申す方へ。」
 「はッ？、磯川。」
 と媼は愕然として眼を圓にする。
 「はッ。」
 「何んですか、あの、貴方は磯川様の御縁邊でも存有つしや
 るんですか。」
 「いゝね、然うと謂ふ譯でもございませんが。」
 「左様でございますか、些ども存じませんでしたの、へい、
 磯川さんへ在有つしやるんですか。」

と、姫は漸次に馴々しくなる。商人体の男は熱心に兩人の話に耳を傾けて居た。

「貴姫は磯川の。」

「は……其の、つい近所の者なのでございます、本宅の方ぢやございませぬよ、王子の方なのでございます。何しろ磯川様と申せば御盛大なもので、王子の方には大した麥酒の製造所もございますし、加之御本宅の方は洋酒問屋とかで手廣く取引を行つて在りつしやるんださうにございます。」
と今更のやうに、お今の姿を熟々と成りつゝ、急に居住を更めて、お今を尊む氣振の見られた。お今は此の言に、種々の故障を挑けて、母を説き伏せ、獨上京の途に上りたる事の幸なりしを、心密に怜りながら、前途は増々暖かき希望のわれを照らすらんやうに覺れた。

其と知つて知らずか姫は更に、

「では若旦那の健三様と有仰る方は御存知で在りつしやいますか。」

「はい、幼い時に別れましたまゝでございすから、今では最う悉皆忘れて了ひました。」

「おや、然うでございすか。私共は能く存じませんが王子の製造所へも時々お出なさるさうでございすか、王子邊では大層お標致よしで調子が好くつて學問も豪勢らしくお出来なさるとか申して居りますよ、尙だ奥様は在りなさいませんやうでございすか、噂には何んでも近くにお芽出度事があるとかいふ事でございすの。まあね、什麼方がお與人になるか存じませんが、磯川様なんかへお片付きなさいました方は什麼に幸でございませう。」

と、意味ありげにお今の面を賤つて居た。お今は愈面を赤くして、答へむ術もなく、胸は奇く願ぎ出すに、傍を向いて微に争先を顔はして居た。商人体の男は斯の時口を容れて、

「でがすか、へい。嬢さんは磯川さんのお知己でがすが、私もしね磯川さんとお永年取引をして居る櫻山といふものでがすが、いや、何處で什麼人と落合ふか知れぬもんだ。何んですか、お單獨でお國の方からお出なすつたので。」

「はら」

と、應接の急がはしさに苦しみが、磯川どの知己なりといふに、お今は何んとなく懐慕しく思はれて、磯川の家内の様子も聞いて見たくもあり、疾や老婆の方を打捨て、櫻山と名告れる男の方へ、話口を更へんとするを老婆は蒼蠅く附絡つて、

「あの、嬢様ね。」

と双方共に嬢様と呼ぶもお今は内心に可笑しかつた。

「何んでございます」

「御油断なすつちや不可せんと。何處に限らず海車の中は怖い箇所ではございしますが、況して東海道筋と申しますと一つの列車の中には鳥散な奴の一二人や二人は必然乗て居りますから。」

と謂ふに、お今は漫に母の言を憶出して悚然とする

老婆は荐ねかゝつて、

「斯の列車の中にだつて悪い奴が皮を被つて居ないとも限りませぬわ。そりや必然居ませ。」

と憚らぬ高聲で謂つて、其の驚のやうな眼を睜りながら、すらり列車の中を覗廻すやうにして、更に商人体の男に屹と目

を注けた。

櫻山と呼はるゝ商人体の男は、疑懼ともせず、唇に微な笑を漂べながら、

「婆さん。」

と軽く呼掛けて、

「お前さん大層族馴れて居るんだね、いやさ、人を見分ける

眼が大分高いらしいといふ事よ。何うだね。俺お何んも見

ゆるね。堅氣な奴だらうか、またお前の云ふ悪い野郎だら

うか、一番人相を見て貰はうじやねねか。」

「旦那ですか。」

と媪は冷静に承けて、忽ちまた、疎らな齒を露出して、呵々

と笑つて、

「左様さね」

と仔細らしく考へる。

「何うなんだよ、おら、判るかね。」

と、詰る言の裡には、明に老嫗の高言を、憎む氣振の見られ

た。

「其様にね、自分から悪黨だらうかッて、お聞きなされる方に

は大した黒徒も居ませんのさ。へ、ッ、旦那なんざ尙だ正

直な方です。」

「何んだと？……ふん。」

と鼻の先で笑つて、

「尙だか可かつたね。ぢや幾か悪黨なんだな、は、ッ、こい

つお可いや。」

と、ついと起つて窓に倚つた。

次の停車場まで来ると、櫻山は莞爾な面でお今等に會釋しつゝ、急忙しげに下車して了つた。渠は東京まで行くべき筈なると、お今は心に不審を立てゝ見たが、何時か忘れて、老婆との雑談にも飽き果てゝ、髪の中の毛瀧車風に飄らしながら、窓外に面を出して、四下の風景を眺めて居た。話と繪とで見當聞いて居たばかりの富士山の偉大なる美觀に驚かされなどして。

富士山の裾も繞つて了つて、其の日の灯ともし頃、漸々と新橋の停車場に下ろされた。

親切なる姫は、其の時までも猶側を離れず、埒の外まで出でし時、

「貴嬢、お荷物でもございますなら、切符をお假しなさいませぬ、私、取つて来て上げませう。」

「いゝね、有難うございます。あの、誰か迎に出て居る筈でございますから。」

「左様でございますか。では其の人をお探しなさいませぬ。そして能く氣をお注げなさいませぬ、甚麽ものが甚麽事をするか知れませぬよ。」

「はい、種々と御親切様に誠に何うも。」

と云つて居る間に、老婆の姿は疾や群集に紛れて了つた。お今は其とも氣が注がず、氣はぼうとして、半逆上せて了つて、夢に見て居た健三の姿の見ぬぬかと、其處此氣と目を配

れど、大浪の打寄するが如く乗客の雑踏する許にて、健三と
おもはるゝ人の姿も見ぬ。然らば迎にとては来ざりしなら
んかど、較疑念を起して、張詰めた氣が弛むと、くらくと
眩惑が来る。おろくして了つて、人に揉まるゝまゝに、右
へ左へ徘徊して居ると、

「嬢様何うなすつた。」

と肩を叩かんばかりにする者がある。誰？、と願背れば、こ
はそも！、午前になる停車場で下車て了つた筈の櫻山と名告
る男であつた。

「貴下は。」

と呆れると、

「婆さん何うしました。何も變つた事もありませんでしたか」
と言調まで變つて居る。

お今は何が何やら煙に捲かれた思で、

「別に變つた事と云つては……、無いやうでございました。」

「其は結構でした。彼の婆々といふ奴はぼん引でございました
畢竟貴嬢を仕事にしゃうとし居つたですが、拙者が邪魔を
して與つたです。態、下車た風をして油斷を喰はしたので
すが、奴もなかなか喰へません。甲を經とるですな、拙者
が術をちやんと飲込んで居て、何も手出しはしなかつたの
でございませう。いや危険々々！」

と謂つて探奇な眼を睜つて、雑踏する人と人と頭と頭とに向
つて、嚴密に注意をして居る。

お今は何を謂はれる事やら一切夢中、氣拔がして了つて、殆
ど泣き出さんばかりの面で居ると、

「貴嬢、何か用事がお在んなさるのですか。何んなら其處で

切符を購つて、車を雇つたが可いですよ。まごくして居ると、また、だにが喰付きますよ。」

と口は優しく云つて居る。が其の眼は鋭く光つて、其の手は稲妻のやうな迅さで、咄嗟お今が金簪に觸れんとした時であつた。件の男にとんと突當つて、

「ふざけた真似をしやがるねッ。」

と叱咤した男があつた。櫻山は素早く群集の中へ影を隠して了つた。

叱咤した男はづつとお今の方へ進み寄つて、

「もし間違つたら御免なさいまし、貴嬢はお今様とは仰有りやしませんか。もし、もしッ。」

「はッ。」

辛而に面を掻けて、お今は物珍らしげに其の人の姿を左見右

う見て、

「貴下は誰方様で在有つしやいます。」

お今は向刻よりの騒動も其の男の叱咤の聲も聞かなかつたのである。

「私お其の、磯川から出迎に参つたものでござります。」

「貴下が。」

「はッ。」

「妾はお今でござりますが、健三様は来ては下さいませんで

したの。あの其とも御病氣でうも在有つしやるんですか。」
「否、何有、御病氣ぢやございません、今ぢや最う、悉皆お
丈夫にお成んなすつたんですが、只今はお留守でございま
す。」

其の聲音の冷さ。

「何、では王子の方へでも。」

とお今は氣遣はしげに訊ねた、

「否、商用でもつて御旅行中なんぞございます。然し兩三日

中には何うか、お歸りなるさうで。」

お今が胸に描いて居た楽しい夢は、たゞ一言に打碎かれて了

つた。迎に來たらざるさへ、既に云はれぬ苦惱を覺ゆるに

存なりかゝつて身の遣る瀬無きは、六年以來焦れに焦れたる

家に着いても、戀しき其の人は在らずといふ。優しい心を有

てる人なりと思へばこそ、其の力に其を頼の綱に、心細き長
途の旅も逢見ん時の悦しさを樂に、はるぐと來りしものを
能くぞ來た！と懐慕しき笑面を見せんともし玉はぬは、そ
も什麼なる思慮ありてか。假令些しばかりの用事ありても
五日三日早く旅行先より歸つて居玉へばとて、人も咲ふまじ
さに！と且は悲み且は怨んでは見たもの、東西知らぬ地
に旅鳥となつては、今は疾や詮なしと我と我を勵まして、彼
男の取計ふまゝに委して、車に荷を積まして、尙だ騷擾の最
中なる停車場を後に見捨てた。車の上心に細き念を運ぶをり
しも、何時かは空一面に掻き曇りて、薄ら冷たき風に添つて
雨さへばらくと降り出しては、また小止みする。断れく
に走る雲のたゞすまひ凄まじく、星の光の一つだに見われ
ざるは、心悲しきわが胸を察して居るのではあるまいか。眼

に入るもの、心に浮ぶもの悲しき心地のせられぬは無く、母の諫められし健三が思慮さへ、夢想を破られたる心には、若や然うでは無いかと思はれもした。此處はさて何處であらう車の停つた門邊を見ると。若葉したしたれ柳の寂しげに雨に濡れたのが、電燈の凄まじき光に、真蒼に見えて、門前には二三臺の車が並んで居た。玄關から裡を覗くと下男下女などが絡繹として、左も急はしげに駆け違ふが見えて一目見るから旅館とは悟られた。

お今は訝しみの眼を側めて、事々しく四下を見廻した。更なり心配はまたもや胸頭に衝上つた。彼の出迎の男は疾や玄關に身を挺して

「さあ、何うかまあ、此方へお上んなすつて下さいまし、お荷物は後から持たせますから。」

ど、云ふに、お今はおどくして、順には歩みも得なかつた懐慕かしい……、否、終生の苦樂を共にすべき、磯川健三の立派なる住居をもてる東京に來りながら、悠る旅館に案内されやうとはお今は夢にも思設けぬのであつた。さては母様の有仰られし言が實なるか。また悠くするは遠來の賓客を待遇す禮であるのか？

「まあ、何んだつて斯様家へ……、お宅は遠いんですか。」

ど、お今は日頃は包み居るさかぬ氣を、ついぞ現はして乾として云放つた。

「否、遠くはございませんがね。」

「ぢや何うしたのです。」

「主人の命令でございますから」

「主人……主人とは誰方なんです。」

自 由 結 婚

「王子の奥様でございます。」
 「王子の奥様とは健三様の姉さんの事ですの。」
 「左様でございます……何有別にお腹立になる事もなければ
 御心配の事もございませぬ。本宅の方混雑致して居るもの
 ですから、常分此方に御逗留なすつて、其から悠々宅の方
 へ御案内申す都合なでさ。へ、へ、此方は何んでござ
 います、手前どもの取引先の田舎のお客などの泊る所でご
 さいますから、決して不安心な家ぢやございませぬ、お室
 もちやんと取つて置さましてございますから、何うかまあ
 お上んなすつて下さいまし、さ、さ。」
 「のべつに饒舌り散らす。お今は底氣味悪く思つて、遂巡
 して居ると、幾人の女中が口を揃へて、
 「何うぞ此方へ。」

自 由 結 婚

と口々に喚く重々の意外に、餘りの事と口も利かれず、況し
 て抵抗ふへき氣力も無く、導かるまゝに一人の女中に離れて
 行けば、手代の言に露違はず、其さへ憂慮の種で、今朝から
 の事を憶出すと、列車中老婆と云ひ櫻山といふ男と云ひ、ま
 た手代と云ひ、斯の女中と云ひ、何れも口數ばかり澤山利き
 て、親切らしく街つて居れど、何處やら底の方に冷な箇所が
 あつて、奈何にしても氣の宥せぬ人等ばかり、其とも是が旅
 の味か、他人風かど。疑ふ下から、突如として囁起つた者が
 あつた。
 「はてな、是が阿母さんの仰有つた魔がさして居るのではあ
 るまいか、妾あ魔に魁まれて居るのではあるまいか、餘り
 事が可笑しいもの！」
 と思ふと、さあ胸が急に激しく響動めき出した。

幾廻かの廊下を透つて、奥まつた、小奇麗な而も物静かな、
 小な一室に案内されて、疲れて綿のやうになつた體を、布團
 の上に置く、手代は障子越しに面を出して、
 「では御用がございますなら、お手を鳴らして下さいまし、
 手前は是で失禮致します、へい。其から能く申し付けて置
 きましたから、御粗勿に致すやうな事はございません、
 「然う御苦勞様でございましてね。何れお目に懸つて御挨拶
 を申上げますが皆様に何うぞ宜敷申あげて下さいまし。」

手代

と有繫に雄々しく、然りげ無き體を装つては居たが、手代が
 去つて後、一入心細さの増つて、様々の取越苦勞も、氣強
 しと日頃慢つた我には似ぬと、お今は獨胸を悩まして居た
 其の夜は終夜睡みもせで、過し方行末の事なと限りなく胸に
 湧立らして居たが、疲れ果てた神身は何時か睡魔に襲はれて
 いつしか眠熟つて了つて、翌朝、隙干の外、板戸の縁啓けら
 れるまで、眼を覺さなかつた。見ると、日の光映々しく、
 うち、照らして、昨夜の雨は名残なく霽つて、欄干の隙より
 見ゆる庭木の若葉したのが、拭込まれた板縁に影を印して居
 た。戦々風は動いて、辛くも春の名残を止めた櫻の梢には、
 色褪せた命短かき花の入重なるが哀れに散残つて居た。
 一日一夜流車に揺られた身裡の痛みの、腕の節々に覺はす
 れど、返つて其も心地好き思のせられて、昨夜の憂慮は一ト

五七

時何處へか逃げて了つて居た。手水をつかつて、化粧を終つて、朝登を済まして後は廊下に人の足音する毎に、例の手代の来たのには無いかど、漫胸を打騒がして居た。辛々晝飯を了へた頃に、無暗と頭を下げながら、敷居越にうん出た男は、昨夜の手代では無く、彼よりは一層意地悪さうな、薄痘痕のある手代であつた。

「實に何うも遅なほりまして、へ、ッ、嘸御退屈様で在存つしやいましてらう。何分店の方が多忙しいものですからへい、へい。是から手前がお供致しまして、王子の方へお運を願ふやうな次第になりましたので、直にお支度をなすつて下さいますやうに。」

「王子？……あの妾が王子へ行くんでございますか。」

「左様、その王子へお供致しますので。」

「お前さん、眞箇に王子へ行くんですか。」

「御戲言を……何んだつて嘘を申しませう。」

「眞箇ですか、もしや何かの間違ぢやございせんか。健健

三さんからは。」

と言沈む。

手代は微笑みながら、

「否、間違はございせん。那樣お疑もあらうと有仰いまし

て、斯の通書付もお渡なすつたのでございます、はい。何

うぞ御覽下さいまして。」

と懐中より一通の封書を取出して、お今に手渡した。

お今は急ぎ封切つて讀下すと……

委細松蔵にも申合め置き候へ共、妾老母こと、此の頃殊の外老衰致し、餘り世話をやかし、心を煩はせ候も

不本意に候まゝ、心ならずも斯の度の結婚は王子の妾宅にて擧げさす事に取さばめ申し置候、此の旨一寸申上候あひだ左様御心得下され度候
三橋家内

お今様

と認められた。斯の冷淡な手紙を讀了つた時、お今の唇は色を失つて、手紙持つ手は思はずも打顫いた。これがそも、契り置さし其の人、信を繋けて、一人の老婆さへ振捨て、道々旅路を辿つて来た者を、待遇すべき辭であらうか。健三が自ら迎へぬまで、兄弟姉妹多き中に、假令一人なりとも迎へに出ぬさへあるに、何事ぞ斯の手紙は。禮を謂はゞ、まづ我を本宅に誘ひて、そが上た事情を語るこそ至當なるべきに、簡短い、冷淡

な一片の書付けはとも懸て健三の妻となるべきわれに對して姉君等の爲すべき事なるか。よし、そは已むなき事情あつての事ならば、眼も瞑りもすべし、然れど、長の旅路の恙を問慰むべき片言隻語なりと書加へて無きは、餘りの所爲。斯くても我は忍ぶべきか斯は謂はでも知るさ健三の不在なるまゝに、父君母君の取計ひ玉ひしに相違なし。

「お、お今は斯くおもひつゝ、
「あの、何んでございますか、妾は健三さんの阿母様にお目に懸りたうございます。そいでお前さん何んですが、室町の方へ御案内下さいましたな。」

と威儀を正す。

手代は頭を掻いて、

「けれども何んでございます、何うも困りましたな。手前共

は甚だ梅しきになつてゐるのか一向存じませぬので、へい
貴嬢を何ういふ工合になさるのか奥の方の事は些とも心得
て居りませぬので、へい。唯有仰つたまふに致しまするて
な譯なんで、へい。實に何うも、へい。何んだか紛擾して
居りますすが、眞箇何んでがすよ其の、王子の方へ在有つし
つては、そりや面白くはございませぬよ。一体姉様といふ
方が卑吝でやかましい屋で意地悪で高慢ちきで、理の判らな
いへなちよこ……おつと御免なさいませし。何んと申しても
手前共は家來の事でございますから、何うお取計ひ申すと
いふ譯にも行きませぬので、へい。でございますから、兎
も角一度王子へお運び下さいませした上で。」
利口に開廻して、一刻も早く急ぎ立てる。
お今は肚の中で、

十

「斯うなりや妾にも量見があるツ。」

都の一部を車上に瞥見して、コライ堂の下、目鏡橋を渡つ
て、明神坂を上つて、舊聖堂の裏を抜けて、本郷通を真直に
王子の三橋が家に着いたのは、午後の四時頃であつた。思つ
たよりは手を盡した建物で、製造所かとも思はるゝ煉瓦の建
物に押並んで、境には一群の樹立が疎になつて居た。門構玄
關、應接間客間など、美々しきが上に手廣くて、奥床しき心
地はすれど、斯は心安まるわが家ではないのである。

三橋の妻である健三の姉なる國子は、お今を迎にと玄關まで出で来りしが、健三に似るべくもあらず、嫫貌おとつて、色黒く肥太つて、見るから不様なのである。身には仕立印の銘撰の袴を着て、赤ッちやけた薄い髪は、おはつ鬘とか云つて極めて高い丸髷に結つて居た。

「貴女がお今様と有仰るんでございませうか。お初にお目に悪ります、妾は健三の姉でございませう。お初にお目に悪るとじろく、お今の服装の田舎染みたのを、嘲けるかのやうに細い目を、いと細くして居た。

「あの、松蔵からお聞及びではございませうが、只今健三は留守なんでございませうね、萬事妾が心得ましてお世話申しまる筈になつて居りますので、はい。多分今夜か明日位には戻りませうとは存じますが、貴女ね、商人の事でござ

いますの、取引上の都合で随分ね、暇を費はる事もあるの
でございませうよ。」
と、毒々しく云ふ。

お今は唯面眩げに俛いて居た。

國子は重ねて、

「二三日の間にはお出なさるだらうつてね、お噂申して居たんでございませうが、振無用事が出来ましたし、根が彼様洒落した性なもんでございませうから、妾に萬事好いやうにと申残して行きましたね、そりやもう頼と氣にして居りませんでしたの、おはよ。」

と無頼に高に笑つて見せた。

斯の素氣の無い、侮蔑つた挨拶に、お今は氣腫して、腹立しくもあつて、頼に答ふべき術も知らなかつた。

國子は追駈けて、

「六年目にお逢ひなさるんでございませうから、定めて健三も容子が變つて居るでございませうよ。其に貴女も最うお年頃で在有つしやるのに、能く、まあ、今まで辛抱なすつて下さいました。這度はまた、遠い處をお一人で眞箇に能くお上京下さいました。皆でもう甚廢にか悦んで居た事でございませう……さ、無疲れて在有つしやるでございませうに、お室も決めて置きましたから、何うぞ此方へお出なすつて、御遠慮なしに寛りとお休みなすつて下さいまし。おツつけ室町の方から母も參る筈になつて居りますから、まゐりましたら、お逢ひ下さいませうやうに。」

と、獨りで饒舌る口の達者。些とは言を温にして、憐れなる孤客を奥まつた六疊にと導き入れた。縁て用意したのであら

うか、火鉢茶道具など取揃へて、床の間には一面の琴が立かけられてあつた。

「お今さん、貴女琴をお調べになりますか……あのお弾きなさいませうの。」

と、國子は故どらしく尋ねた。

「いゝね、どう誠に不調法で……あの不器用な性質なものでございませうから。」

「ではお茶だの花だのは。」

と、意地悪げに曇みかけた。

お今は誠教はつた事が無いので、恥かしげに口を噤んで、唯悦むとして居た。

「御存知ではございませんの、ちつとも。然うでございませうか。ではお裁縫の方はお上手で在有つしやいませう。」

「何んだつて、まあ、ほんの真似事ばかりなので。」

「でもまあ、お裁縫さへお出来なさいますれば格別御不自由

はございませんのさ。だけとお茶なごはね、是からは些と

お心掛なすつたのが可うございませぬ。覺えといて損なも

のはございませんし、加之お客などの待遇には是非ね、鳥

渡心得て置きたいものでございませぬ。」

折から、玄關に車を引入るゝ音が、けたゝましく聞ゆる。

國子は耳を聳て

「母が参つたのでございませぬ。」

お今は起つてお迎にと云へば、國子は制して、

「否、其には及びませぬ、然うでないは何んだか變でござい

ますから。」

六六

國子健三等が母親のお定といふは、丈の高い瘦ぎすの老婦人

である。額廣く鼻高く男にせまはしき程の顔立に、些ばかり

の和氣も無く、心さまいと嚴峻とは思はれるが、國子の下卑

たのよりは優なるべきか。共に伴られたのは、健三が妹に

て就れも未だ年少ければ嫁いだの云つては一人も無い。

新の一行三人が動搖めきながら入來つた爲、閑であつた家内

は遽に賑かになつて、庭に面した客間に請じられた時は、最

も樂しげな談笑聲の、襖を洩れてお今が居室に聞ゆるた。

六九

聴てお今の此の一座に初見の禮を盡さんとして立出し時、衆一時に口を噤んで、無儀に珍客の面を目成つた。國子は口を切つて、

「阿母さん、此方がねお今さんと有仰いますの、さ、お今さん廻と何うぞ。」

と、座を勧める。さて一通の紹介も済み、初見の挨拶も果て了ふと、彼等は送にお今には解し難い談に熱中して、お今が側にありとは更に心づかぬやうであつた。お今は今更に、行末の娘、將來の姉たり妹たるべき人を待遇さんともせざる、彼等一族の心の冷たさを異しとは思へど、其を面にも見さで口を噤んで悄然として居た。

「さあ、那樣ものでも召食つて下さいまし、態々風月から取

寄せて置いたのでございますから。貴女、西洋菓子はお可厭。」

「否、阿母さん、お今さんは何んにも召食らないの、妾等とは違つて誠にお上品で被入しやいますもの。」

と國子は母親の言を引取つて、憎々しく云つた。

「姉さん、姉さん。」
と今年十六になつた妹のお春といふが、急忙しなく姉を呼掛

けて
「眞箇に昨日のお演劇は面白かつた事よ。一緒にお出なさると可かつた事ね。眞箇に現金なお光さんよ、ね、そらお向ふのお光さんね、彼の方が兄様もお出なさるのか何うかと聞くから、行くんだと云つたら、其れならお伴をしませうッてね、餘程兄さんが所好なんだから可笑しいわ。そして

始中終側にはばかりわたがつてお在有なさるんだもの。」
と、無心に語り出して、今一人の妹お花と面見合して、何事
か思出したやうに莞爾に笑つて居た。」
母は苦り切つて、面を擧めて、

「何んだね？、お蓮さんが其様事を……。男の側なんぞへ
無暗に行きたがるやうでは、何うせ碌な人ではありません
そしてお前達もお蓮さんと遊ばないやうにね。」

「だつて阿母さん、眞箇に氣の好い面白い方なんですもの、
其に兄様が淡然して在有つしやるもんだから、そいでお蓮
さんは所好なのよ、何も悪氣のある譯ぢやない事よ。」

「否、初めの間は然うでも、段々猥褻な事が仕度なつて、終
に親の傍附にも背いて、好いた人に縁付いて、人が鼻ッ摘
にして居るのも介意はないやうなお轉變になつて了ひます

何んの氣も無しに、女だてらに男を追駈廻す奴も無いもん
ぢや無いかね、自体お蓮さんに限らず、今時のお嬢様達は
衆然うなんだよ、あ。親の目を偷んで、夫婦約束をして、
揚句に男の家へ突如に押駆けて來たりなんかして、其は野
面なものさね。」

と、冷にお今をながし目にかけた。

お今は垂頭いて黙然として居た。

「何が何んでも、女の身としては男の方から縁談を申込むま
では温厚しく待つて居るのが順當なのに、其が段々と鉄面
皮しくなると、女の方から男に攻掛けて來ます。いや眞箇
に油断も隙もあつたもんぢやないね。女の氣の大きな落着
濟ましたのなんざ、餘り讀めたものでも無ければ見好いも
のでも無いのさね。」

ど、空囃く。
斯は明に我を嘲けり、我を抵觸るなりと、お今の煩は何時しか熱くなつて、そも什麼なる罪のあつて、到着早々悠も酷たらしく謂罵られる事かど、お今は身裡を煮ゆるにして、思はず儘をぶるくと打顔はした。而して姑と仰ぐべき人と思つたお定をば、屹と向上げると、お定も見下ろして、双方が殺氣を含んだ睡は、はつたり中途で衝突つた。」

二十一

母親のお定は猶も痛罵の言鋭く、
「れ、悠う謂つちや誠は何んだが、お今様を側へおいといて

意見でもするやで、實に何んだがね、變なやうだけど、お今様だつて老年の謂ふ事には無理はないから、聞いてお匿きなすつて御損にもなりませう。まあ妾等の限から見ると、婚禮と謂や今時の若い人等は、爺の子の遺取りか、備人の出入りでもするやうに、極軽く見てお在りだけども、一生の運が是で突まらうと謂ふのだから、其れはなかくの大切なものさね。親があれば、親の氣に入らないものを貰つても可けないし、其かど謂つて自分の女房だから自分の性に合はないのも可けないし、釣合はぬ不縁の基つてね、身分に隔があるのも可けなし、其は面倒つたら、斯様難かしいもんでさ。宅などでも漸々と商賣は手廣くなつて来るし、所夫はもうね年を老つて了つたし、妾も何も關ひたくなつて了ひます、ね。健三が確乎して居ますから、そりや

ね。可いやうなものぢやあるけれども、然ればと謂つて片輪ぢやなし、何時まで獨身でも置けません、其處でございます。連合になつて行く人が餘程伶俐でない、到底大勢の備人から何から何まで氣を配つて、立派に磯川の臺所を捌いて行くのが難かしい。」

と、家の繁盛を鼻にかけて、飽まで人もなげな言分。お今は身動もせず、俛いて、兩手を壁に支へて、口惜しげに肩を窄めて、襟身の血を頭へ衝上らして、氣はわく／＼して、耳鳴り眼暗暈み、咽喉渴き動烈しく、殆んど座に堪り兼ねたのであるが、凝如と保ひて石の如く固くなつて居た。今朝は奇麗に取替ひし鬘の毛さへ、幾筋か頬に亂れて、早や熱き涙の露かど其處に宿るのであつた。國子は意地悪さうは唇を緊んで、高處で見物といふ面相であつた。お春お花はお交際だけ

去

に垂頭して居た。母は勢に乗つて、

「ですからね、是迄に参事官をなさる方の妹御だの、銀行の頭取の娘だの、議員のお嬢様だのつてね、随分種々な箇所から申込もあつたのですがね、行末の事を心配致しますと、輕躁に取決めて丁つて、取返しのかない事をしては何んだと思つて何處のも体好く斷つて與りましたの。中には是非と思ふのも無いぢや無かつたが私の氣に入つたのは健三が嫌ひますのさ。ね、面倒なものでね。あれはもう、是非にお今さんと謂ふ事ですから然うと取極めて了ひましたのが愈々然うとなればお今さんも餘程考へて載させんとね、昔の養生ッぽとは悉皆違つて了ひましたから。今ぢやもう立派に財産もあり學問あり器量もある、あの紳士とやらなんですから其に連添つて行きなされるお前さんといふ人にも

去

また其の重味が無くては困ります。いや困るどころか中々辛抱が為難からうかと思ひますのさ。」

其の邊の事は能く考へて戴きませんが、お互の利ではありませんが、早いかな不縁になりますもので添遂げるといふのは、一緒になる無用の事でございませぬ。奥入早々家内が揉めては、是だけの家柄なもんですからね世間に対中ても實に何んですら、其の困りもしますさ、此方では成べくの点は眼を瞑つて居ても、お今さんの方で好い加減に飽が来ては……其がまた世間に好く例がありましてね野合で夫婦になつたのは、お互ひに我儘があつて、ついで不問になります、可うございませぬから何んだ彼だつて紛糾のあるのは實に可厭ですのさ。ね、國や然うぢやないか。私の家では往昔から堅氣が看

夫

板で、好合つて夫婦になつたなんて事は、嘘事になつてありやしません、健三一人ですの、恣意可厭な變なのは。」

と、老の一徹、塵みかくつて述立てる。國子は有緊に聞兼ねてか、

「阿母さん、今更那樣事を有仰つたて、お可哀さうに、お今さんばかりが悪いんでございますまいし、そりや健三の罪でもなし、何の縁なら仕方がないぢやございませんか。」

「その縁が可くありません、私は嫌ですよ。」

と激しく謂つて、悪返したのか、

「だけとまあね、仕方がないやね。年寄の癖に口幅つたい事を謂ひましてね、兵衛にねお氣の毒でしたね、氣に掛けらや不可ませんよ、お今さん。私だつてお嫁にしやうといふお今さんだもの随分ね、齒に絹着せず思つてる事は何んで

夫

も謂つて了はうぢやございませんか。氣を悪くするのはお
今さん、お前さんの僻といふものですよ。」
と、稍言を静にして、

「さ、お今さん、お今さん、お室へ行つて下さいまし、其
も御退屈なれば……、あ、春ちやんや、花ちやんも此の姉さ
んと一緒にお庭でも御案内申して上げな、躊躇して居ない
と。」

と、追出すかのやうに急立てる。お今は何時か、突俯して了
つて居た。

「姉様お庭へ出て見ませう、さ、在有つしやいな。」

とお春は慰顔に優しく誘つた。

「春ちやん、其よか製造場の方が面白いね。行つて見やうぢ
やありませんか、ね。」

とお花は異議を申立てる。

「いうね、製造場よかお庭から裏の田圃へ出た方が可いね。
製造場は汚なくつて可けないから。」

と姉妹の言争の間に、お今は鼻うち拭んで、身の姿致を整して
誘はるゝまゝに、お今と打連れて、庭に下り立つたが、青葉
若葉の、うら／＼とした景色も目には入らで胸搔亂れて口惜
しの涙ばかりが熱々湧き出る。」

一 十 三

健三だにあらば、一族零つて我を辱めたからと謂つて、我が

橋どなつて、我を疵護つて下されだらうに、其の人の在ま
 ぬばかりに、長へに忘られぬ侮辱に潔きわが身を汚された本
 意なさ。母なる人の言の端々で察すると、遠度の婚禮は誰一
 人悦しい面はせぬ様子。冒頭からわれを淫奔な娘と一様に見
 做して、出で来るだけ我を遠ざけんどの氣組は、昨日からの仕
 向けてに能くも承知された。吁、間違ではあるまいか。我
 を見損つて居るのではあるまいか。世に人を見損ねる程、事
 の齟齬の出来るものはあるまいに、そを謂解かん事も胸には
 含み居れど、尙だ馴れもせぬ母とも仰ぐべき人と言争して、
 萬一健三の耳に入りたらば、我を何んとか思召さう？、口惜
 しさは胸の脹裂けんばかりなれど、何事も其の胸に籠めて、
 よく暫は忍びて待て！、徐ろに我が信を知る人の歸り玉はゞ
 機を見て濡衣干して腹痊する時節もあらう。

ど慙う我と我を慰めて、お今は密と目の中の涙を拭つた。然
 り上る炎を制へたのである。
 がまた、思返すと、慙くも無情冷血高慢無愛想な人々の中に
 永の月日を送るといふは、わが終生の幸福を護るべき道では
 あるまい。推して斯の結婚を遂ぐればとて、久しくも待たで
 家内の風波に、奈何なる禍のわが身に落来るやも知れず、思
 へば母様のお眼こそ高かつたと謂はねばならぬ。我は斯のま
 ゝ身を退いて、國へ歸つて母様と睦まじく、穩かな、暖い一
 生を送らうか。而して戀を捨て、了はうか。と、お今は身
 一つに關はる刻下の難儀を、奈何にして脱れんかと、慙と幸
 福との岐路に迷つて、埒も無く胸を悩ますのであつた。
 「姉様何うかなすつたの……彼方に大きな池がありますから
 彼方へ行つて、鯉に躑でも遣らうぢやありませんか。」

どお春は、氣遣はしげに、お今の面を窺つて、妙に眞面目に

なつて眉を翹めて居る。

氣軽な性質と覺しく、奈何にしてもお今が機嫌を復さんどて

か、

「其から、兄様はお明日あたりお歸りなさいませの上、眞箇

だ事よ。妾兄様が一番好きなだわ、阿母さんは昔の人だも

んだから、一酷でね口姦しくつて爲様がないのよ、ね、

花ちゃん。阿母さんは誰にでも彼様事ばかり有仰るんだ

から、だから衆に可厭がられるのよ。でも兄様には何ん

も有仰らないから可笑しいわ、男だともつて、兄様は疾くお

歸りなさいと可いの、ね、

ど、一生懸命になつてお今の氣を紛らさうとする。

其心に率かれて、お今は胸の鬱憤の稍解けたかのやうな思

がして、二人に連れられて庭を一廻して、何時かは、うか

ど田圃へ出て了つた。日は早や西に傾く田圃道を、三人はぶ

らくと歩を進めると、

「やつ、何うなさいました。」

と馴々しく呼懸ける者があつた。

お今は願背つて、

「賈下は……。」

「櫻山です。此方へ来て在有つしやらうとは思も懸けません

でした。意外です、何うして此方へ、は、あ、製造場を

御見物ですか。」

「はい。」

「お今は忸怩して居ると、

「何んですか、お嬢様達御案内ですか。」

と、口の軽さ。お今は何んもなく可厭な心地はしたれど、
つて居る譯にも行かず、

「昨日はまた、種々御世話様でございました。」

「いゝね、何う致しまして。何んですか、是から室町の方へ
お歸りですか、其ならばお伴致しませう。私も彼方へ歸る
のでございます。瀛車の時間も恰度好いかと存じます。何
有、此方でお泊りなさるんですと……成程、暫時御滞在な
んですか。では失禮致します……彼の、室町の方へお出向
なさる節などには、何うぞお立寄下さいまし……穢い住居
ではございませうが、お茶位は購つてありますよ。」

と、懐中を探つて名刺を取出して、

「此處です……下谷區徒土町二丁目……番地。近隣でお聞き
になれば直に解ります、店先に枇杷樹などが轉つて居ます

から、
と、輕快な笑を残して、櫻山は、どつかは停車場の方へ急い
だ。

「姉様、彼の方何處の方。」

と、お春は怪訝な面で訊ねた。

「何處の方なんですか……一向知りませんの、昨日瀛車の中
で連になつた人なのですが。」

「然う——何んだか眼光のぎよるッとした可厭な人だわね
妾見られた時怖かつたわ。」

「でもお家の事などは能く知つて居ましてね、お店とは取引
して居るとか申しましたよ。」

「然う——妾知らないわ。」

と語りながら、舊來た道へ引返す。

「昨日から、理から謂へば、勿論何も不思議の無い事ではあるが、お今は
 紛れて、今また逢つて、また
 考へると、斯の選に離れた王子で逢はうとは思はれぬ事
 漫気懸になつて、お今は山左の頬の黒丸子をば何時まで
 事でも忘れなかつた。記憶は居た。そも何等の因縁があつての
 事であらう。」

六六

一十四

家へ歸ると、日の暮れぬ先にと、母親は夕餐食べ了つて、二

人の娘を連れて、本宅へ歸つて了つた。家の裡は、再び舊
 の如くに寂然して、遊び疲れて歸り來る國子が子等の聲のみ
 を樂しげに聞けた。
 「お今様、先程は無何んでございましたらう、心では那樣に
 思つて居るのぢやございませんが、ついね、やかまし屋な
 もんですから、あのお氣になさらないが可うございますよ
 此室は夕方は誠に陰氣で可けませんから、お二階へ入つし
 やいまして、随分景色が可いんでございますの。」
 「有難うございます。ではお二階を拜見致しませう、そして
 何んぞ御用がございましたら、御遠慮無く有仰つて下さい
 まし。」
 ど、打解けかゝると、國子は其には答もせず、さつくと室
 を出て行つて了つた。もしや此の室に用があつて、暫しわれ

六九

を退けるのではあるまいかと思つて、お今は懶さうに身を起して二階へ上つた。

時しも寂しい夕景色に、お今は、やゝともすると掻き曇る目に野邊を眺めて居る間、ふつと憶出したは、今夜もし幸に健三の歸つて來なば、先づ此方へは來るべきに、或は其の姿の見ゆもやせんと、覺束なき一点の望を抱きながら、見遣る向ふに、其かあらぬか、犬を連れて若き紳士の、銃を肩にして野の一筋道を斯の家目がけて急ぎぬる。

近づくまゝに眸子を凝らすと、獵帽を戴いた下よりして見ゆる眼の、健三の眼に能くも似たり……と思はれた。鼻の下に八字鬚を生やして、頬彫み丈高く、肩には幅があつて洋服姿の雄々しさ。お今の記憶には健三は瘦せた人であつたが、さうては人違ではあるまいか、否々、昔には似るべくもあらぬ健

康な體とはなり玉ひしと聞くものを、六年の星霜さへ経たものは、變り玉ひしは無理も無いこと！鼻の彫、頬の肉づき近頃送られし寫真に露違はぬは、此は健三様ではあるまいか？。と思へば、お今の胸は漫に跳り出す。

種々と念案する邊さへ無く、欄干の上を身を伸ばして、我が姿の敏き眼に映れよかしと願つた。然れど其の人は、何も氣付かぬやうに、口笛鳴らしつゝ悠々と門内へと進み入つた。

門に進み入つた時、彼は恰もお今が厭下るす眼に……はッど氣付いたかのやうに、弗と面をあげて樓上の姿を眺めた、お今の胸は愈々跳つて、驚きの餘りに、涙さへ差合んだ。

其の時、豈は見ぬなかつた八歳ばかりの國子の子が、裾に絡はりつく犬の頭を撫でながら

「伯父さん！」

とばかり大聲に叫んだ。

今は疾や疑ふべきで無い。國子の夫かとも思つた微な疑さへ

霧のやうに消れて了つた。國子の夫かとも思つた微な疑さへ

お今は半ば幻心で、どつかは階子を降りて、玄關へ出やうと

する。と、恰度、國子は納戸で洋燈を灯して居たが、健三が

歸りしや否やを糺す進さへ無く、呆れた面で見遣る國

子には頓着なしに、お今は、突と玄關に出て了つた。

上框に腰うちかけて、草鞋脚半を解いて居る其の人は、出迎

ひしたお今には心着かぬか、子供と何事か語つた居た、お今

は頓に胸塞つて、口さへ利かれぬといふ始末ときまきして、

居ると、葦所から駈けて來た女中が、

「お湯に致しませうか、水でも。」

「否、池へ行つて洗ふから、取らずと可。」

其の聲は、健三の聲が、誰少しばかり大人びしだけの事と思

つた。雖然渠は、お今には言も懸けず、切戸を啓けて庭へ行

つて了つた。

一度は拍子が抜けて、恍然我を忘れて了つたが、お今は氣を

取復して、争で池の邊へと追駈けて、胸に溢ふるゝ思の底を

一言なりと語らばや。と、恥し極の悪さ打忘れて、一散に

庭木の間を潜つて、其の人かと思はるゝ人の方へ突進した。

折からの夕焼、池の水面は、紅流したらんやうに眞赤になつ

て居た。池の汀まで來ると、後に躓いて來た獲犬は訝かしげ

にお今を向上げて居た。が、健三は其と心付かざるものゝ如

く、水面を覗く巖頭に腰打かけて、後向になつて、徐ろに足

を洗つて居た。

人の氣勢に、ふいと振向く途端、お今は我慢を破つて、

「貴郎、什麼に待つて居りましたらう。」

彼は惘れて

「貴嬢は！」

と冷に尋ねかけた。牙をた眼を圓に睜りながら。

「郎貴は。」

と鵝返しを行つて、お今はさつと面を赤くして、たじく

と二歩三歩後に退つた。

男は冷然として居る……。

二十五

「貴女は……あ、若しかお今さんと有仰りはしませんか。」
と男は尙訝しみの眼を睜つて居る。

「では貴女は、健三さんぢやございませんでしたか。」

と、お今は茫然其の男の面を眺つた。

「はあ、私は其の、健三の弟でございます。」

「弟御。」

「然うです、弟の頼四郎なのでございます。」

「まあ、そんな事を……。」

「何う致しまして……併し貴女は。」

「今でございます。」

「然うでしたか。然うだらうと思ひました。始は氣が付かん
かつたですよ、兄から寫真などでお目に懸つた事もあつた
ですがね——いや失禮致しました。」

「何んだつて貴方、妾こそ……。」

と、お今は恥しさに頼に言も出なかつた。

あゝ、健三が弟なりしか、弟を有てりとは、お今は徹に耳に

して居たのであつた。が、是が弟とは夢にも思設けぬのであ

つた、餘りに健三の遅さまゝ、歸を待焦れて深く考へる暇も

無く、唐突に後追なせしたる我が輕卒の漸しさ。弟御はとも

何んとか思做し玉ふ事であらう。

と、お今は穴にでも入り度心地、少時は忸怩して、

「妾あまわ、とんだ失禮を致しました。」

と今更のやうにつぎ端なく謂出して、火のやうに熱る面を反

向けて居た。

頼四郎は意にも聞けぬ体で

「何有、貴女には限らんですよ。誰でも能く兄と取違へて笑

になるのです、希しくもありません、誠に能く肯とるさう

ですから。加之、初めてお目に懸つたのですから、私を健

三だと思なすつたのは、寧ろお目が高いと謂つても好い

位なもので、何有！、決して御粗魚ぢやございませんとも

私こそ能くお面をも見ないで、御挨拶を申上げませんで、

誠に失禮致しました。何うかまわ、是からは面倒を見て戴

かなくつちや……随分腕白な我儘者でございますからね。

……何時東京へお着になりました。

「昨日着きましたので。」

「然うですか。お單獨で。」

「は。」

「何うです、お國とは何方が面白さうでございます。」

「尙だ一向勝手を覺はしませんものですから。」

「御理道です、其の間に兄と一所に其處らを御案内申しませうよ、貴女は……いや貴女では變だ、何うせ何んだから、姉様と呼ばして戴く事に致しませう。後で貴女から姉さんに榮轉などは餘り結構なものでも無いですから……宜しいでございませう。」

「奈何でございませうか。不束者の事でございませうから。」

「ところが僕、大に駄々子なのです。先日兄に鉄砲を購つて與れと謂つて駄々を捏て與つたのです。先生大にへこむで了つて、購つて與れたですがね、僕家の者には鼻摘にされて居るのですよ。母などは、もう格別の待遇で以て僕を操縦しとるのですが、僕關はんです、氣に喰はぬと今ですら此の大きな頭で地輪を踏むですわ……些と滑稽ですが、僕平氣です。此處の姉などは僕甚だ意見を異にして、其

の結果、往々……いや毎度衝突するのですが、彼は馬鹿です。僕の姉の事ですが、僕好なのは兄だけです、ですから兄も愛して居るですよ。貴女……いや姉さんも何分何うか。」

ど、饒舌るわ、饒舌るわ。然雖、其の辯舌の爽なること、其の體度の輕快なること、渠は一箇これ、剽輕な無邪氣な眞率な少年であつた。年はお今から見ると、二ッ三ッばかりも年長であらうか。お今は何んもなく懐慕しい心地がしてつい恥しさを忘れて了つて、覺ゆる笑を催しながら、

「何うかまわ、屈きません点はお教へ下すつて。」

「お教へ申どころか……嘸證ればかり居るでせう。何しろ斯の無遠慮です。一体其が看板で且自慢であるですな。餘り譽た自慢でも無いですか兄が不在で嘸何んでしたらう、

つまらんかつたでせう。併し何有直に歸ります。明日あたりは先生、大元氣で歸つて來ますよ。そりや歸らずに居られませんか、兄は甚く待つて居たですよ、實際です。僕大分愚弄つて與りました。さあ入らうぢやございませんか。晩には御馳走を致します、美味くはないですが小禽を少しばかり撃つて來ました。是とても兄の賜物なので、兄が購つて與れた鐵砲で大に功名をしました。僕も兄が不在なのが甚だ遺憾なので、居ると今夜はへこまして與つたのです。何故かといふに、先生鐵砲を購ふ時に僕の技倆を侮蔑して甚く不服を並べて居つたのですから。」

と、まくり上げた股服を下げながら、葎に燈火の火を移して悠然と動き出す。夕日は製造場の一角に落ちて、今や樹立の上にかゝり、蒼然たる暮の色は遠近となく遙渡つて、池の水

面は薄黯くなつた。折しも何を見つけたのか、樹立の奥の方で、獵犬が一齊に吠出した。頼四郎は屹と耳を聳て、頻りに口笛を吹鳴らしたが、犬は猶啼止む氣色が見ぬに、目の色變へて、

「姉さん、何卒お先へ。」

と、謂つて、一散に後へ引還して纏て木陰へ姿を隠して了つた。

一十六

「頼さん、お前お今様にお逢ひかた。」

と、國子は茶を注れながら、懐食な聲で謂つた。

「あゝ、逢つたさ。逢つて一場の會話を試みたが、いや案外だね。案外だつたよ、姉様。」

「何が案外だつたの……あれが兄様のお内儀さんにならうといふ人なのさ、能く御覽だつたかね。」

「見たよ。」

「立派な……いやさ、好い娘だらう。然うさ先づ娘といふところだね、彼の品格がさ。」

「何うして！、なか／＼別嬪だよ。僕最初、不様な田舎娘が來るだらうと思つて居たが……真箇案外だつたよ。堀出し物といふ奴なんだらう。斯うなつて見ると姉様皆悉僕を欺して居たんだ、實際寫真よか百倍も立勝つて居るもの、田舎の寫真屋といふものは下手で粗末なんだから、人を損ね

るよ。」

「可厭な頼さんだ！。妾が何時お前を欺しました。」

「欺したさ、欺さないとは謂はさんぞ。姉様は何時か然う謂つたよ、お今さんは此の頃來た鳩胸の女中に能く似て居るつて。」

「誰が那樣悪口を利きました。だつて考へても御覽な、妾は尙だお今さんを見なかつたんぢやないかね。見ないで那樣非難がつけられますか。馬鹿々々し。」

「然うさ。だから見ないで解るものかと主張したら……僕がだよ。見なくつても屹度然うだと押張つて居た癖に！。見よ、最後の勝利は誰が手に落ちたかを！」

と、胸を突反らして誇つて見せる。

國子は口惜しさうな面をして、

「だけどさ、頼さん。餘り威張つて貰ひますまい。彼ならば假設然う謂つたところで澤山の誤謬でもありますまいよ。」

と、空囀いて見せる。所以冷静を粧つて。

「大誤謬！、蓋し三橋國子女史一生の恥辱と謂はざるを得ないやね。僕をして公平に且卒直に判断せしむれば……だね

云分の無い女さね。彼ならば磯川健三の妻として、何處へ

押出して立派なものさ、聊も恥づる点はないよ。兄様は

實に好い妻君を持つたんだ、彼をして鳩胸のづんぐり先生

と較べるなんどは、寧ろ滑稽さ。」

「おやく、おやおやおや。大層お氣に入つたと見えますね。

頼さん大層お目が高くつて在有つしやるのね。」

と、無暗と驚いて見せる。

「勿論さ。」

「其の先は……無論かぬ？」

「混返しは恐れをす、眞箇のところ、非難はないね。品格が

ある、容貌はよし、其で温和しくつて、東京にだつて滅多

に居ない美人さね。是だから長男に生れたいものだと思ふ

んだ。」

「何故。」

「何故つて姉さん、是が僕だつて御覽、到底阿父さんや阿母

さんが聴許れて呉れはしないや。」

「健三だつて同然然うさ。這度のお話だつて纏るか纏らない

か、尙だ能く解らないんだもの、妻の考へぢやまゐ、餘り

……どころか大變に好ましくないの、阿母さんとも云つて

居たんだよ、何うにかして國へ歸して丁したいものと思つ

て居るのさ。那廢婦人で可げや妾あ、幾人でもお世話申し

「まよ。」

「何うか願ひたいね……是非！」

國子は躍起となつて、

「真箇だよ、是まで申込んで来たのを御覽なね、中には随分醜いものもあつたけど、其でもお今様などは、到底較べられたものぢやない。何うも今度のはお廢にしたいね。」

「よろしい！、誰が何んと言はうと、僕一人で兄様に加擔して、斯の縁談は纏めて了ふ。姉様は此の頃大分邪慳になつたよ。」

と、

頼四郎は眞面になつた。

「何うせ妾お邪慳だともね……毎度着物も縫つて與げないし

お小遣も與げないもの。だけぢね頼さん、女でなくては女の鑑定は出来ないものだよ。お前のやうに容貌にはばかり見

惚れて居ても爲様がないよ。」

「でも姉様は、容貌が悪いと非難して居た筈ぢやないか。」

「そりや容貌だつて感心もしないしさ、第一氣立がね。」

「姉さんの様に好く無くつちやね……然うだとも。はゝゝッ

これは大笑だ。」

「もう妾は何んにも云ひますまいよ。氣立が好からうが思か

らうが、お前の奥様でもあるまいし、那樣可厭味を云はな

いでもの事です。」

「誰も難癖などはつけはせんよ。そして其こそ姉様の奥様に

するんぢやあるまいし、兄様の氣に入つてさへゐれば澤山

だ。」

「其の上お前といふ味方がおありだから、お今様も氣が強いやね。妾もお今様のやうな方に生れりや可かつた。」

其の時、次の間に微な足音がしたので、頼四郎は其と眼で知
らして、兩人謂合はしたやうに口を噤んで了つた。
玄關の邊で、またも犬がけたましく啼出した。
頼四郎は面を嘲めて、
「今夜は兼に蒼蠅く啼きやがる。」

一七

微な足音といふはか今のであつた。
か今は一室にのみ閉籠つて、人々の前に出ぬといふは、因循
とや笑はれもせまいかと思つて、従々と納戸の口まで來ると

……我が名の國子と頼四郎の口から述るに、卒然足を停めて
襖の外にイミながら密と耳を聳て居たのであつた。而して
引返さうとした時、其の微な足音の頼四郎の耳に入つたので
あつた。
お今の身裡の血は一時に騒出して、今更のやうに口惜涙に暮
れて居た。國子が言様の毒々しくも面憎くなるに反して、頼
四郎の心の花の香ばしさよ。わが粗忽は聊も答める氣色の無
いばかりか、姉に恃つて、われを辯護し、われを疵保はんと
する情の有難さ。斯の人こそは、敵の中にわた一人の味方な
れ！と、お今は漫に感涙に咽つたのであつた。夕餉の膳さへ
頼四郎の謂ひしやうに、一同打揃つて箸を取るでは無く、お
今一人家族と時を隔て、淋しい食事は果てたのである。心地
何んどなく惱ましくなつて、食さへ咽喉へは通らず、たゞ心

外の涙の熱く頬に傳はるのが覺えられた。が、斯ばかり胸を痛めて、もしや病の床に就いては、其こそ身の大事。然なくとも四面楚歌の聲……とも謂はうか、一家擧つて排撃の聲の高い中に憎者とはなつて居る身が、病でもすれば什麼なる憂目に逢はうも知れず。と無理に氣を取復して見たりなぞして今宵健三の君の歸り玉はずば、我はそも什麼にすべき？。斯うまで冷遇される事を知つたならば、母の諫に従つて昔のまゝの境遇に身を安んじて居たもの、遙々と東京三界まで来て、六年の間胸に描いて居た楽しい夢を破壊されて了はうとは、夢にも思はぬ事であつた。樂しき日！と待ちに待つて居た其の今日は、われを意の外なる苦艱の地に突落す今日であつたのであらうか。

お今は口惜しい事、腹立しい事、悲しい事、心細い事、東京

へ着いて二日と経たぬ間に、限無い悲みと而して口惜しさとを嘗めさせられたのであつた。お今は、其の希望の光の餘りに輝かしかつたので、一方には斯る苦痛の生れて来やうとは思つて居なかつた。其の魯さを思ふと、在るに効無い心地もして、お今はたゞ泣いて見るばかりであつた。

斯の愛を拂はんには小説こそ可からめ！と遠棚に二三冊載せてあつた書を取つて、燈火排立てつゝ繕き始めた。が一生の大事の身に迫つた時機なればか、眼のみ文字を辿れど、心は其には移らず、胸は來さむの憂に攪亂れて、頭は千鈞の推もて壓さるゝやうに重かつた。夜は早や九時頃でもあらうか。微睡まれやうとは思はぬが、枕に就かば些どは心の静まる事かど、教へられた如く押入を開けて、寢道具を取出すとして居ると、誰？、人の來る氣勢のするに、思はず悸とし

て、胸裏さ言効も無く身を縮めた。足音は襖の外に止まつて
纏て芬の高い莖を匂はせながら、襖を啓けて面を出したのは
頼四郎であつた。

「最うお寝みですか。」

「否、まだ寝みは致しませんけれど……まあ、お入り下さい
まし。」

と、お今は極悪げに、押入の箇所へ突立つて居た。

「お邪魔でございませう、別に用事も無いですから、また明
日でも。」

と早や立去らんとするを、お今は本意なげに其の面を見入つ
て、片手を頬に當がつて居た。

「否、お邪魔などころぢやございませぬ、向刻は實に失禮致
しました。」

と又も想ひ浮べたやうに面を背向けて居る。其の半面は明に
火影に照らされて、豊肥とした頬には、淡く血潮をさし上ら
して居た。

「尙だ貴女彼様事を……然し何んだかお顔の色が悪いやうで
すが、種々な事をお考へなすつて、お氣分でも悪くなすつ
ては可けません。一兩日の中には、兄も歸つて参りませう
から。」

斯の温い言に、お今は覺ゆる慄然とした。が、然り氣無い体
で、

「向刻はまた何事もございませぬでしたか。」

「何んです。」

「犬が大層啼きましたか。」

「あ、あれですか、何有別に……何んでしたよ。迂散な奴

が邸の外を徘徊して居つたです。」

「は、迂散な奴が？」

と、お今は眼を睨る。

「何有、通行人だつたかも知れんです……もう御心配なさる事は無いです、犬に威嚇かされて其奴は何處へか立去つたやうでございますから……其よりか貴女大變にお顔の色が悪いです、氣をお注げなさい。而して餘り心配なさらんが可いですな。」

一十八

「貴方、何を考へ込んで在つしやいます。」

「いゝね！、何も考へて居るのではございませんが。」

「お眠いのですか。」

「眠いどころか、寢やうと思ひましても到底寢られないのでございます。」

「何故です。」

「何んだか淋しいやうな氣が致しまして……加之何んだか胸が噎がして、氣が落着きませんでね。」

「餘り心配なさるからでせう。心配は可けません。非常に身體を損ねるですよ。」

と難しい事を謂ひ出す。

「別に心配といふ譯でもございませんのですが……つい、詰らん事を考へ出すものですから。」

「では階下へ下りて姉と何んぞお話なすつたら可いでせう。

ね、何うです。」

「否、妾は姉様等のお氣に入らないのでございますから、無

暗にお側へ行つたりなせしませんと、反つて何んぞございま

せうから……御迷惑かども存じますから。」

と、お今は急に聲を曇らせる。

「姉がまた何んか失禮な事でも謂つたですか。關はん。僕叱

つて與ります。一体彼女が冷淡で我儘で、僕非常に嫌なん

ですが、でも不思議に人の妻になつて子まで有つとるです

ね、そして家庭は極めて圓滿なのです。あれでも、僕甚

だ不思議で耐らんです。ですから僕時々謂つて與ります、

世の中は捨てる神あれば助ける神あり！、で妙、不思議な

ものだつて！。すると彼女は面を真赤にして青筋を立て、

慍むです、僕がまたなんなんです、其の面を見るのが奇態に
面白……ちねすと、と手を拍ちたくなる。」

一種の調子を有つた其の邪氣の無い語り振りに、お今は、つ

い失笑したくなつて、挨拶に困つて、忸怩して居ると、

「ですから、姉が失禮な事でも謂つたのでは無いかど、僕想

像したのですが。」

「否、別に何んとも有仰つた譯ぢやございませんが、彼方に

限らず、皆様が妾の参つたのが、大層お氣に召さない御容

子でございますから。」

「成程……。」

と、考へて居て、

「其は斯うですな、貴女はです。尙だ健三が歸つて來ぬとい
ふ事をお忘れなすつては可けません。兄さへ歸つて來ます

れば、形勢が一變します。多分其の都合だと思ひますから
 那樣心配はなさらんが可いですよ。今日は母と妹とが参つ
 たさうですが、甚厭風でした？ 母も随分自分の感情を隠
 さない方ですから、お氣に障る事もございませうたらう。」
 と、問はれると、お今は漫に、雲間の事を憶出して、口惜涙
 に暮れながら、斯くまで、故障の多い結婚は、果して思ふ如
 く其の望が達せらるゝのであらうか？ 健三は謂ふまでも無
 いこと、斯の故障は恐れぬとしても、我は其中に立ちて、一
 片の誓を健三に實行さするは立派な婦人であらうか。と、
 心弱い考へを惹起しながら、お今は默然として居ると、頼四
 郎は其とも知らず、
 「母も何か面白く無い事を謂つたど見えますね。可いです、
 可いです。磯川の家族には頼四郎といふ者が居る事を忘れ

て戴きたくない。追々母や姉にも開聞かして、不都合の無
 いやうに致します。」
 「否、那樣事は何卒お止しなすつて下さいまし、皆妾が不束
 だからなんでもございませうから。妾は何故、鐵面皮しく此
 方へ参つたのでございますか、今になつて見ますと、其の
 氣が知れませんでしたの。」
 「詰らん！、詰らんですよ、那樣事をお考へなすつては涯が
 無いですよ。」
 「でも妾は斯のまま……。」
 「何んです。」
 「一層國へ歸らうかとも思ひます。」
 「お國へですか。」
 「は。」

と、お今は泣彫らした眼を密と拭いた。頼四郎も悄然して、垂頭いて了つて、

「そんな事を有仰るッ、貴女は其で好くつても兄が困ります。」

と、眞面目になつて、

「そして姉や私が付いて居ながら那樣事になりましては、兄が何様に感情を害するか知れんですよ。」

「其でも……妾は設甚塵壓苦い思でもしませうが……耐へはしますけれど、其では却つて健三様のお利で無いかと存じます。」

「では僕の考も述ませう……か。」

と、頼四郎は急に威儀を整して、屹とお今の面を噴つた。

十九

奈何なる事の其の人の口より漏出づるのであらうかと、お今は息を凝らして其の人の面を噴つた。

「貴女が那樣……國へ歸つたりなされますると、其こそ兄は婦人一人を欺いて、貴重な一生を犠牲に供させられた事になるではありませんか。那麽氣弱い事を有仰つては自他のため非常な不幸ではないですか。兄をして……ですね、婦人一人を片輪にさして、輕薄の悪名を負はすのも、弟の身として傍觀しどるのも忍びなければ、貴女をです、可うございませるか。貴女を……失望さして、慍らして……です、一生を

不幸にして丁ふといふのは、僕忍びんです、耐へられんです。また國へ歸らうなきといふお考へは失禮ではあるですが、お一人で遙々御出京なすつた貴女にも似合はんと謂はんければならぬですね。」

「徳は申しませんが、貴女は到底吾々の一族と氣が合はぬとすると、終生貴女は不愉快で居なければならぬ。其よりは一層といふお考があれば、兎も角もでございませう。成へくならば……。」

と、口を噤んだ。

お今は決心した面色で、

「妾は實に詰らない事ばかり申しました。最う御心配なさらぬいで下さいまし、甚だ事あらうと、健三様のお心の添らぬうちには、お世話になりませうでございませう。」

「其が可いのです、其が可いのです。勿論さうなくてはなりませぬ。さあ最う遠慮お話しは休にませう。何うです階下へお出でなすつては。姉も居るですから何か變つた話でも致しませう。お一人では反つて氣が附いで可かんですよ。姉とても段々お昵近になりませれば、自づと心安くなりませうから……お可厭ですか。」

「でも妾が参りましては。」

「何故ですね。關はんですよ。何んですか那樣にお氣に障るやうな事を申しましたか。」

と、頼四郎は不満の体である。

「別に妾は何んでございませう。向刻も鳥渡お聞き申しませぬ、大層お氣に召さない御様子でございませうし、妾も何んだか極が悪いやうな氣も致しますから。」

「では何んですか。もしや向刻姉と貴女のお噂をしまして居つたのをお聞きなすつたのぢや有りませんか。」

「いゝね！」

「然うですか。お隠しなすつちや可かんですよ。」

「では申しますが、實は……」

「お聞きなすつたのでせう。」

「はい。何有、ちよいと。ちよいとお聞き申しました。彼に相違無いのでございませうから、妾は何も……頓と平氣なのでございませうが、姉様がお蒼蠅いでございませうと存じまして。」

「何うも彼が姉の癖なので。」

と、頼四郎は氣毒げに、

「だから僕姉を好かんですな。然し意からといふのでは無く

たゞ一時、僕に抵抗して見たくつて罷つたのでございませうから、深くお氣にお懸けなさる事も無いかと存じます。

……ではお寐なさいまし、明朝またお目に懸りませう。」

「まあ、貴方、可いではございませんか。」

と、お今は慌忙と留める。何んもなく懷慕しく、離離ない氣がしたので。

「いや大分お邪魔したですよ。」

「何んだつて貴方、那麽事が……お話しなすつて下さいましな。氣の故か、今夜は何んだか氣味の悪いやうに淋しくつ

て仕様がございせんから。加之、向刻に有仰つた鳥散な

奴……お邸の周圍を徘徊して居る奴があつたと有仰つたのが、氣に懸つて、底氣味が悪いやうでなりません。もしか

……。」

ど、お今は覺はす口を滑らしたのであつた。果女は頻に櫻山
と謂ふ怪しの男の事を憶浮べて居たので。

「もしか……が何うしきました。」

「何うと申して劇に……。」

と言淀む

「盗人でも入りはせぬかと有仰るのですか。」

「ま、然うなのでございます。」

ど、お今は切抜けて了つた。

「其ならば大丈夫です。」

近所の紡績會社製紙會社では、頻に汽笛が鳴り出して、格下
の柱時計が、無心に而して能辨に十時を打つたのは、大分向
刻の事であつた。世間は寂黙して、銘酒屋を素見さ歩く職工
等が、耐力も無い事を話ふやら喚くやらして行くのが手に取
るやうに聞ゆる。山の下邊で、凄まじい激車の地響がして、
其が漸次に幽になつて、遂に聞ゆるやうになつて了ふと、垂
頭して黙然として居た頼四郎は、翹然と面を擡げた。

「併し、兄は幸福者ですよ。」

ど、染々ど、歎息するやうに謂つた。

「何故でございます。」

ど、お今は不審らしく訊ねた。

「何故と謂つて、其は所以も無いですが。」

「所故も無くつて貴方、おはよ。可笑しいではございません

か。

「可笑しいですかね。」

と、眞面目に、答を備ひるかのやうに聞いた。

「ま、然うではございませんか。」

「併し兄は幸福者ですよ。」

と、頼四郎は大聲に謂つて、

「第一、貴女といふ……がですね、兄を非常に愛して在るの

しやる。」

「其が幸福なのでございますか。」

「幸福でなくつて何んでございませう。」

「大した不幸かも知れせんわ。」

「何故？、僕那麽不幸者なら、今直にでもなりたいですね。

實際。」

「ひよつとすると成つて在るのしやるかも知れせん。」

「僕が……ですか。」

と、呆れる。

「は。」

と、云つて、お今は飽いた笑聲を漏らした。

「お愚弄なすつては可けません。」

「眞箇。」

と、お今は軽く謂つて退けて、莞爾する。

其の時、ついで閣から起上つて、こつと、蹠足で楯下へ下

りて行つた者があつた。誰？。兩人は夢にも其を知らなかつ

た。

少時すると、

「頼さん、頼さん——。」

と、槽下で奔走つた國子の呼聲がした。

三

頼四郎は思々しうな舌打をして、

「呼んで居るですから、失禮致します。併し大變にお邪魔を
しましたよ。ではお寢み！」

「でございますか。」

と、お今は洋燈を持つて、槽子段の上口まで見送つた。

「もう可いです。」

「は。」

とばかり、お今は一人取残されるのが本意なげに、頼四郎の
姿の間に消れて了ふまで目送つて居た。

室へ歸つてからも。

「真箇に優しい方。」

と、呟いて、恍然として居た。

母、姉には露ばかりも似て居らぬばかりか、心様優しく、同
情深く、體度の此の上も無く邪氣の無いのは、健三に優らう

とも、よも劣らうとは思はれぬ。設、一族擧つて我を酷たら

しく待遇へばとて、恚る頼もしい味方のあるからは、畢竟は

自分幸福ではあるまいか。何を苦しんでか、自ら焦心て自

ら懊惱して居るのであらうか。と、お今は全く頼四郎の温い

心に絆されて、其の夜は力めて悲しい事を忘れやうとした。

が、ふとすると、其がまた、母に聞はれた魔に魅まれて居る

のでは無いかと思はれもして、何れにしてもお今は、心の痛

む事ばかりであつた。

翌朝眼を覺ますと、障子には長閑に日が照つて、雀と雀との

轉づる聲が、宛然物の賣立つやうに聞えて、其の樂しげなこ

と。お今は卒然と枕を掻けて、思はず世の樂しさに心着いて

完爾して、胸の愛の急に洗去られて了つたやうな心地で居る

と、ふつと耳に入つたのは、

「昨夕何時にお歸りだつた？」

と、國子の聲であつた。

「何時だつたかね。」

と、男の聲……其の聲は頼四郎の其とは些とばかり違ふかと思はれもした。

「大變遅かつたやうだつたね。」

「遅かつたよ。」

さて健三が歸つたのではあるまいか。と、お今はふいと思

付く。胸の動悸は急に激しくなつて、歡喜の情はひらくと

我を振り付ける。

「何か變つた事が無かつたの。」

「何んの變が？」

と、怒を合んだ聲であつた。愈々間違なしと思案を定めて、

お今は突と立起つて、髪のはつれを撫で上げるやら、面を拭

くやら、襟を整すやら、襪を合はすやら、急はしく身繕して

階下へと駆け下りた。

三十一

手洗を遣つて、心ばかりの化粧を凝らして、お今は納戸の方

を出ると、是はまた！、思ふ主の健三はあらで、頼四郎と姉

どが何事をか闘争つて居るのであつた。兩人はお今の姿を見

ると、挫と口を噤んで了つたが、國子はしろくどお今の化粧をした顔を眺めて、然も侮蔑んだやうに、眼の中に一種の

四十五

冷笑を湛へた。

頼四郎は極めて真面目な面形で、今猶胸の静まらぬやうに、怒氣を含んだ面色怖らしく、屹と姉を睨まいて居た。そも何事か言争つて居たのであらう？と、我が身に係つた事ではあるまいかと、お今は漫に胸を轟かした。

國子は憚らぬといふ面構で、

「だつて頼様、子供の謂ふ事には、ね、偽は有りはしないよ、邪氣が無いんだもの、正直な点を謂ひます。偽は吐きませんさ、はい。妾は、何も見た譯ぢやないのだけども、眞箇だよ、見も聞きもしないけども、昨夜は頼さんが何處に何をしてお在有だつたか知らないけども、子供が然う謂ふぢ

やないか。」

「誰らん！、何を謂つてるんだ、好い年をして！」

「そりや何爲妾は婆さんです。」

「慍らすと可いぢやないか。其は實際昨夜は遅くまで邪魔をして居つたのださ。」

「はうらね。」

と、國子はいたり面。

「はうらね、が、何うしたんだ。」

「庭でも一緒になつてお在有だつたらう。」

「なつて居たッ。」

「威張らなくつても可いよ。」

「誰が威張るもんか。其がまた……一緒になつたから何うしたといふのだ。」

四十六

「何うもしないけれども。」

「何うもしなければ、何んだと謂ふのだ。」

「やかましいね、静におしよ。妾お嬢ぢやないの頼さん。」

「知つとるッ。」

と、頼は膨れる。

「知つてお在有ならば、些と聲を低くして頂戴……頼さん

んは妾の事を無愛想だの、冷淡だのと謂つてお在有だけ

も、頼様のやうに那樣に早くから仲好になつても困ります

嬢といふものには那樣に用事があるものですかね、へ——然

うですか。」

「可笑しな事を謂つてるね、何を謂つてるのか、要領を得な

501

「然うね、要領を得ずまいさ。妾で見れば何も不思議は無

いやなものよ、他人から見ると随分疑も起きますよ。兄

様がお聞なすつたら、變な氣持もしやうかと思ひますの。」

「姉様、おい。本氣で那樣事を謂つてるのかね、僕はまた餘

り姉様の冷淡なのを攻撃したので、其で那樣冗談を謂つて

るのかと思つたら、眞面目なかね。驚いたよ、事が餘り

とぼけ過ぎてお話にならない。」

「そりや妾は無愛想でございますよ。何うせ頼様のやうに行

届きはしませんの。併しね頼さん、豈那樣事があらうとも

思はないけれども、他人から那麼噂をされて分疏の出来な

いやうな事はお仕でないよ。そしてお今様もですね。」

と、意地悪さうな眼で、じろりと見て、

「餘り弟などの側へお寄んなさらない方が可うございます。

弟は實に氣輕な質だもんでございますから、貴女がお優し

いと、増長しまして、また昨夕のやうに遅くまで一つ室に話聲の聞ゆるな、は餘り詰めた話ではありません。」

國子は憊る家柄に生れながら、慥まで口さが無く心賤しきは、そも奈何なる故であらう。お今はさつと、面を真紅にして、暫は備いたまふ、呆氣に取られて居たが、些ばかりの事とは謂へ、他事にはあらず、辯解せでは棄置難しと、

「そ、那樣事を有仰つては、妾ばかりか弟御も御迷惑なさいませうし……足らはぬ妾ではございますが、那樣事を謂はれる覺は些ともございませぬ。お庭で御一緒にやりませしたのは。」

と、疾や涙聲になつて、恥しげに事の始末を語ると、國子は失笑して、

「何んですつて……まあ、お若くつて在有つしやいますの

に、お目でもお悪いでございますか。健三と申せば貴女是から夫と仰ぐ人ではございませぬか。弟と間違ふといふ事があるものですか。」

と、行儀を崩して笑顔れる。

「餘り滑稽で居るぢやありませんか。ぢや一層の事取換へて了ふと可いわ。」

と、又一しきり高に笑つた。

頼四郎は苦り切つて、

「呆れて口が利けないへらず口だ。何んといふ下素な事つたの。馬鹿ッ！」

と一喝する。

「何、何爲妾の馬鹿なの。」

國子は獨可笑しがつて居る。

お今の面は火のやうに熱つて居た。

四

二十一

朝飯も果てた後、國子は人と演劇見物の約束があるとか謂つて、九時半の涼車で東京へ行つて了つた。お今は斯の午前二時、遅くとも健三に逢はれる事と思へば、何んもなく胸が跳つて、心も空になつて居る。何うにも室には、熱と座つて居られぬに、玄關に近い應接室に行かうものど、衣紋繕つて立出づると、櫛子の下で出會頭に、はたと頼四郎に出會つた。お今は何んもなく面を紅くして、二三尺後に身を退くと、頼

四郎は然あらぬ体で、例の悪氣無く、

「姉は居りませんか。」

と謂つて、通りかゝる下女を呼止めて、

「奥様は何うしたね。」

「奥様でございますか。あのお出かけになつたやうでござ

います。お演劇ださうでございますよ。」

二人でかゝる。

「はう。」

二人でかゝる。怪しからんね、お客様をお連れ申せば可いに

お今さん貴女をお誘ひも致しませんでしたか。」

と、お今の方へ向く。

「否、何の道妻はお供を致しても居られませんか。」

「でも人を待つてるといふものは、誠に無聊なものでござ

四十一

ますから、人群へでも出て居ると気が紛れて居るですよ。

「其も是も妾が足はぬからでございます。」

「那麽事があるものですか……二階へ在有つしやい。寫真で

もお目に懸かせよう。」

と、強つて誘ふに、辭まひ言も無く、お今は頼四郎の審察と

覺しき和洋折衷の室へと導かれた。開放した窓からは、漸う

暑い日の差入つて、壁にかけた油絵の大なる額の裸体畫は、

其の半身を照らされて活如として居る。圓形の卓子の中央に

置かれた桶の花の香は室へ満々して、風の吹入毎に芬々と鼻

を衝つ、室の体裁などで見ると、惟ふに頼四郎は西洋趣味に

富んで居るのでもあらうか。頼四郎は飲さしの葉巻を嚙らせ

ながら、

「僕はもう、御存知の通り二男であるですから、道廢處に押

籠められて居るですな。勿論家に取つては兄の様に必要な

人間でも無いですから、餘り不平も謂はれんのです。其の

代にはまた、責任も無いですから、近々のうちに又ニエー

ギョヤの方へでも行かうかと思つて居るです。日本ばかり

が自分の骨を埋める地でもございますまいから。」

と、己が事業の経歴などを説明した。

「では健康三様だけは始終此方に。」

「然うです。兄が居らんければ、畢竟商賣が出来ないのですか

ら、出る譯には行かんです。製造所の方も本店も支店も悉

皆兄の監督の下にあるですから。戀て結婚なさると、貴女

も旁御盡力下さいまし、其の時になると、母でも姉でも今

の様に仕向けは致しますまいから、何うかまあ、其迄御辛

抱なすつて下さいまし。」

其の懇切なる言に、お今は幾ど感入つて、溢るゝは涙熱

い甲は、ばら／＼と膝の上に亂れ落ちた。

「否、妾などには到底那樣才器がございませぬけれど、何分

にも宜しくお願申します。そして貴方と御一緒に此方で御

商賣をなさると、健三様をはじめ、妾まで什麼に心丈夫で

ございませう。お單身で御遠方へ在有つしやらなくつても

可いではございせんか。」

と頼四郎を見上げる其の眼、宛然火の如くに燃えて、何事か

語ると見られた。頼四郎は思はず一種の哀觀に撃たれて、較

少時口を緘んで居た。

「何有、僕などが居ても何うせ何んにもならんのですから

其に三四年前から企てた事業もございませぬし、父や母は不

替成なのですが、是非、も一度行つて地の形勢を察して來

やうと思ひます。」

と謂果らざるに、轢々と車の響の門前に聞えて、聽て門内に

砂利の軌ひ音がして、玄關際ではつたり止つて了つた。

「兄です。」

と、頼四郎は急しく起上つた。

「健三様でせうか。」

「然うです、間違ありません。」

お今が想像したに違はず、健三の風采は全く一變して居た。清しい眼削けた頬など、往昔の面影を留めては居るが、額は廣くなつて、口髭は豊に、體度何んもなく貫目つきで、重々しくも嚴めしくなつて居た。渠は出迎したお今を一目見て、微笑みながら。

「来たか！」

と、然して喜悅の情の面に現はれたとも思はなかつた。

「はッ。」

謂ふまでも無く、お今は内心甚だ平で無い。六年の星霜は實に短しといふでは無い。閑散で且つ平穩な田舎生活を送つて居たとは異つて、商業と家事とに纏繞し、激しく身神を勞する事なれば、美しかつた少年の血色褪せて、額に刻む皺は、明かに經營慘澹の迹を語つて居るのであつた。

お今は先づ己が室へと健三を誘つて、一別以來の久闊も叙した後、

「お變りもございませんで。」

悦しさに聲音は願はて居る。

「體だけは健康さ。」

と横柄に謂つて、

「お前些ども變らんね。唯少しばかり成長つて、苦勞を爲覺めただけが違ふ位のものだらう。私などは最う悉皆變つて容貌も根性も此の三四年は甚く違つて了つて、往昔のやうに暢氣な、お坊様ではないよ。随分すれつからいになつて了つて、何事も面白くなく困る。若い間の事つたね、面白いのは、其の代間違も爲出來すが、は、はッ。」

「其はまわ、何んでございませうが、差當つて早速ですが。」
言淀んで、俯きながら溜息を吐いて居た。
「差當つて？……が何うした、何んだといふのだ。何か心配な事でもあるのかね。」

四十六

「は。」

「否、然うぢやないんでございませうよ。」

「然うでなければ、何かね？」

「お家の事でございませう。」

「家が何うしたね。」

「何んだか、お家の御容子が大變に可笑しいやうでございませうから今更妾は何んの爲に参つたのか、と思つて、甚麽に心配だか知れやしません。ですから貴方のお歸りなさるの

が、什麼に待遠でございませうたらう、貴方、妾はまわ何うすれば可いのでございませう。」
「お今は斯の一兩日、胸一杯に盲がつた思を、今一時に斯へやうと急燥つのであつた。
健三は平然として、

「何が那樣に心配になるのかい？。勿論迎に行くのが至當だつたのだが、斯の通す暇も無いといふ始末なんだから、ついでに何んだつたのさ。ね、其の位の事は察して與れんければ困るぢやないか。私に着いたからは最う何も心配する事もないぢやないか。家の様子がまた何うしたといふのだ。」
「何處までも無頓着である。」
「お今は答に窮つて默然として居た。斯の磯川の一族が、我に對する事の冷淡で而して酷薄なるを思へど、日常其の中に立

四十九

交つて、ました親たり子たり同胞たる骨肉の親しみあるを、血の異つた他人の、其の間に弾劾の言を挿まば、却つて健三が感情を損ねて、我を仿ない者と思はぬでも無い。が、我が心を洞察いて居る者と謂つては健三で、我に同情を表する者か、と謂つても、同然健三であらう。と斯う思つて、お今は到着以來の事情を詳しく語り出した。語つて了つて、

「でもその心細いものは妾ばかり、貴方からのお手紙があつたものですから母の不承知なのを無理に出掛ては参つたものよ、妾は實に思も懸けぬ事ばかりで、何う爲やうかと思つて居ましたの。」

と附加へた。

「其が同然、私を手頼にして來たのに、留守だつたものだからね、非常に落膽して、心細く思ふ矢先だものだつたので

左程にも無い事が、深く神経を傷ましたのだらう。心配する事も無いよ。」

と、事もなげに謂はれて、お今は較不満の思を抱きながらも強つて争はうとはせず、

「然う有仰れば然うだつたかも知れません。」

と、内心の腹立しさを隠して了つた。が、斯くては、六年の間信を繋ぎし人も、我が眞の味方では無いやうであつた。健三は重ねて、

「何れ近いうちに、正當の順序を踏んで引取るまでは、私に餘り此方へは來ないからね、其の目算でね、可いかね、母はよりは姉の方がお前の話對手にもなるだらうから。加之姉は随分氣輕で世話好ではあるし、萬事お前の事は委しておから、可いかね。」

お今は斯の意外の言に、今まで忍に忍んだ我慢は破れて、あつと泣き俯して了つた。

「あゝ、何うしたのだね。」

ど、不快げな面をして尋ねる健三が言の冷たさ。「あゝ、健三は昔の健三であらうか。お今は健三を見誤つたのではあるまいか。」

二十四

お今が爲に將來の運命の鍵を握つて居る健三は指いて問はず唯一の味方、唯一の友であつた頼四郎も、此の二三日は何事

か深く物思に沈める様で、楽しい同胞の團樂には加はらず、朝は夙くより何處へか車を飛ばし去つて、夜は更深くなるまで歸らなかつた、其の様平常の、軽快で而して樂しげな舉動には似やるべくも無かつた。が、一日の事、頼四郎はお今を訪ねた。お今は幾ど久しく會はなかつた兄弟にでも逢つたやうな心地で、何となく胸が打騒がれた。お今は其の所以を知らぬが、頼四郎の側にある時ばかり、心は得謂はれぬ恍惚に浴するを覺れた。

「何うなさいましたの、三四日お目に懸りませんでございませしたね。」

「然うですな。」

「貴方は又、些ども家にはお在りなさいませぬのね。大層お忙しい御様子でございませすが、何んですか、いよく遠い

土地へお在有なのですか。」

「否、未だ然うと定つたのでは無いです。家にはばかり閉籠つて居るですが、最う貴女には兄が附いて居りますから、お淋しい事も無いかと思つたですから、其でつい無沙汰致しました。が、一向其の後の様子を知りませんが、御結婚は何時になつたのですな。」

「今は急に怖れて了つて、」

「さ、其の事でございませぬ、最うやがて一週間にもなるのでございませぬ、健三様からも國子様からも、些ども何んども有仰つては下さいませぬ、何うしたのでございませうか、また何かお差支でも出来たのでございませうか。」

「四郎は深く心を動かされて、」

「顔も訥らぬに、お今は、ほろ／＼と涙を零した。」

「今日になつて何も差支のあつた理ぢやないですが、或は。」

「其の面をお今は、もじ／＼と眺めて、」

「或はと有仰いますのは……、什麼事なものでございませう、妾はもう皆様には他人待遇にされて居りますのでございませぬ、御様子伺はうと存じましても伺ふ譯には参りませぬ、切めて貴方は……、能く妾の事を御心配下さいませから、斯う申しては何んでございませぬ、妾は什麼に心丈夫に思つて居るか知れませぬ、何うぞお差支がございませぬのなら、御存知の事をお聞かせ下さいませし。」

「頼四郎は微笑みながら、」

「何有、其は何んですよ、僕の口が這つたのでございませぬ、」

甚だ都合になつて居るか、僕些ども知らんですよ。實際で
 す、併し何れにしても……、ですな。兄が歸つて来た以上
 といふものは、御心配なさらん可いですが、大丈夫です。」
 「でも健三様は、何か大層妾に秘して在りつしかるやうで
 ございますから、妾は眞箇に……眞箇に心配でなりませんの
 女といふものは氣の狭いものですから、種々な事を考へて
 つい、邪推も致しますの。」
 「否、僕が憂慮ひますのも其處なのですよ、兎角世の中は行
 達の多いものであるですから、双方で何か腹中に啣んで居
 つてゝすぬ、感情を打明けないうで居ますと、そんな開遠が
 起きるですね、何うか那麻事だけは無いやうにしたいと思
 つて居るのでですよ。」
 「では同然健三様が何かお秘しなすつて在りつしやるので

さいませう。もしや妾の外に餘儀無い干渉でも……ね、
 か、在んなさるのでございませう。」
 「那麻事もありません。」
 「でなければ。」
 「其處ですよ。人といふものは他人の氣の附かぬ考へを有つ
 て居るものですから。」
 「では健三様は、妾に愛想をお盡しなすつたのでは。」
 「否、然うお取んなすつては困る、愛想が盡きたといふので
 は無いでせうが。」
 「では甚だ譯なのでございませう。」
 「お今は頻に氣を揉み語す。」
 「否。」
 とばかり頼四郎は、事ありげに熟と考出して、

「世の中といふものは蒼蠅いものですな。」

「其は然うでございますとも、妾も此度上京して斯度つまら

ない苦勞しやうとは思ひませんでした。」

と、不服がましく謂ふ。

「御道理です。」

「真箇に健三様も無情ですわ。」

「さ、其の底には何か事情が絡つて居るですよ。一口に謂へ

ば兄は迷つて居るですな。」

「何？ 迷つて？」

「然うです。」

「迷つてとは、甚だ事なのでございませう。同然妾が可厭に

なつたのでございませう。」

「然うで無いと謂ふ事だけは、僕が保証します。」

其の時突然、袂がさつと啓いて、兩人の話を遮つたのは健三
であつた、頼四郎もお今も極り悪げに身を縮めて、氣後がし
たのか、頓に口を開き兼ねて居た。健三は冷な眼光で兩人を
見交して、傲然として兩人の間に、どつかと座つた。

二十五

三人は較暫時俯き膝に、一座は白け亘つて見ぬた。

健三は口を切つて「四五日は非常に忙しかつたので、つい無

沙汰をしました。で、何うしたね、何か二人で、大分溜や

かなお話が始まつて居るやうだが。」

と、送送りに面おもてと面おもてを見較くらべて居ゐる。今いまは何なにんとなく氣き恥ぢかし
いやうな思おもひがせられたのか、面おもてを背そむひけて居ゐた、頼たの四し郎らうは調しら子こ
好よく、

「僕わがもね、久ひさしくお今いま様さまに逢あはんかつたからね、今いま日は久ひさし
ぶりで見舞みまつたところだつたんだ。」

と、辯まが解げめかしく謂い出した。

何なに故ゆゑか、健けん三さんの眼めのうちには冷ひや笑わらの色いろを帯おびて居ゐた。

お今いまも漸しだう口くちを開ひらいて、

「大おほ層そうお忙いそしくつて在あ有うつしやいましてたんですつてね。其そのか
ら頼たの四し郎らう様さまには着ききましてから以もつ來と、大おほ變へんお世せ話わになもま
したから何なにうか、貴あなた方かたから宜よろしくお禮らいを有あ仰うやつて下くださいま
しな。頼たの四し郎らう様さまでもお在あ有うなさいませぬ、妾わがの眞ま箇ごに、什なに
麼なにに心こころ細こまうとさいましたらう。」

「ふむ、那その様さまに何なにか弟あにに心こころ配あはれをかけたのか。」

「何なに有あり、偽いつはりだよ、兄あにさん、一いっ緒しょに居ゐたもんだから、そりや

僕わがも……、何なにさ。ついで朝あさ晩ばん口くちを利きくと謂いつた譯わけだつたのさ

世よ話わなんて那その麼なに氣きの利きいた眞ま似にはしやせんよ。那その麼なに譯わけぢや
ないよ。む。」

と、渠そのは少すこなからす慌あわ忙わてゝ居ゐた。

「何なにれ世よ話わにもなつたらうさ。ふムッ、既すでに磯いそ川がわの家いえ族ぞくとな

つたからは、そりやお互あひたに親おしくもせんければならんのだ

から、別べつに不ふ思し儀ぎは無ないばかりか、まづ大おほきに祝いわせんけれ

ならんのだらうよ。な。」

と、お今いまの面おもてを瞥ひとと瞋いらゆる。

頼四郎は其の時座を起つて、室を去らうとして居たので、

「まあ、可いではございませんか。兄様がお怖いんでござい

ますの。」

「私が来たからと謂つて、何も那樣に急ぐ事は無いぢやない

か。おい、頼ッ。」

「邪魔だらうからね。僕が居ては邪魔をして居るやうなもの

だらうから。」

と、苦笑に紛らして、頼四郎は室を出て行つて了つた。

お今は其の後を目送つて、

「誠に優しい好い方でございますね。そして大層お仲が好く

つて在有つしやるといふぢやありませんか。」

健三は冷に、

「然うさ、何方かといふとまあ、仲の好い方なんだらう、彼

でもなかく、亂暴な性質なんだがね、不思議にまた優しい

点もあつてね、私と違つて愛嬌があるのさ。」

「何處か遠い處へ行つしやるんだとか謂つてお在有でござい

ましたか、何んだつて邪魔處るへ行つしやるんでございま

す。」

「何んだ？、那麽事まで話したのかい。秘密にして居るのだ

といふに自分で喋舌つて歩く馬鹿もないものだ、其が家の

方では父親が不服を唱へて、阿母も大に賛成しないし、近

々のうちに妻君でも貰つて、世帯を持たすと謂つて居るの

だから、果して行けるか、行けないのか、さ、疑問なのさ

ね。」

「何かまあ、行つしやらないやうになりますと可うござんす

がね。」

「然うさ。」

「だつて長い航路、船で行つしやるんだから、危なうございませうわ。」

「大層弟の事を気にするぢやないか。」

と、健三は微笑んだ。

「否、然うぢやございませんけさ。」

と、お今は狼狽して、

「精格お昵近になつたのでございますから、遠方へ行つしやるといふと、何んだか淋しいやうな気が致しますわ。」

「道理さね。」

と健三は感心したらしく。

「だつて然うぢやございませんか。」

と、調子に乗る。

「で私ならば何うだね。」

斯の意外の問にお今は呆れて、

「何んですつて。」

健三は冷笑つて、

「同然心配かね……、また平氣か、念の爲鳥渡聞いとかうぢやないか。」

呆れて居たお今は、急に昂然として、

「知りません、はい。澤山お愚弄なさいまし。」

「慍らんでも可いよ……、私も氣懸だからね、其で、つい聞いて見たのさ。」

「氣懸とは……、什麼氣懸なのでございませう。」

「さ、什麼のかね、私にも解らんのだがね、お前知つてお在る有ないか。」

「人を馬鹿にして在有つしやるッ！」

「何う致して、馬鹿にするどころか、實際！」

「實際？」と 問へ反すと、

「本氣なんさ！」

と、健三は屹と容を改めた。

二十六

其から三日ばかり経つてからである。春は断りも無く、何處へか行つて了つて、花は掃き集められた掃溜に名残を留めるばかり、野も山も急に翠滴るばかりになつた昨日今日、青葉

を眺めんと風の流でもあるまいが、一日健三は東京へ見物に
とお今を誘つた。思も懸けぬ事とは思ひながら、お今は修飾
もそこく、に、纏て打連立つて、王子の三輪の家を立出た、
此は六年目に面を合してより以來、健三が優しい仕打の鷹矢
であつた。

兩人が上野に着いたのは、午後の三時頃でもあつたらうか。
花は黄土に委して、青葉若葉に較微暗き萬目の光景を眺めて
お今は健三の説明に耳を傾けながら、漫々と歩を進めたが。
耳に入る健三の聲、其の情、何うやら六年以前に、町の裏田
圃を越進した時程に美はしく聞かれなかつた、其の底の方に
は偽が籠つて居るやうに思はれて。
水彩畫展覽會を通覽して、東照宮の石燈籠の開を抜けて、石
段を下つて、不忍池の畔へ出た時には、お今は足弱の痛く疲

れた体が見た、池の中の辨天に参詣して、
歩く時であつた。 舊馬場の境を漫

健三は憶出したやうに、

「時に結婚は何時にしやうね。」

「御都合次第になさいませ。ですけれども可成お疾く……ね
まも、待遠ですわ。」

ど、今は面を赧くして居る。

「何方にしろ決つてゐるんだから、急ぐにも及ぶまい。是から
少し商用の爲、旅行するかも知れないから、其の後の事に
する方が可かないか。」

「ぢや又何處へか行つしやいますの。」

「ひよ。行くよ。」

「大層お忙しいんですね。」

「然うさ、弟と違つてね、私は實に忙殺されて了ひさうなん
だ。」

「左様でございませぬ——。」

ど、悄然了ふと、健三は底意ありげに、

「加之弟もまだ急に旅立はしまいから、王子に居たからと謂
つても寂しくはないだらう。」

「でも頼四郎様も御迷惑でございませうし、國子様も甚麼に
かお懊惱くつて在有つしやるだらうと存じますと、實に……。」

「實に……、が何うしたね。」

「何んですの、氣苦勞でなりませぬ。」

「つまらん事を謂つたもんだ、何が氣苦勞かね、はッ。で
も何んだと謂ふぢやないか、弟とは大層氣が合つてるとい

早

ふぢやないか、而してお前も大變氣に入つて居るのだから
姑や舅の側へ来る前に十分氣樂に遊んで置くが可いのさ。
其から何んだ、萬更書生でも無いのだから、式丈は正當に
ね、立派に爲たいと思ふから、双方の支度にも時日が費は
るだらうし、彼此一月位は何ににしてもかゝるだらう。」

「まあ、一月でございますつて。」

「然う！、一月。不服かね。」

「いゝね、不服ぢやございせんが、餘りお客様ぶつて御厄

介になつて居るのも何んでございますから。」

と溜息吐く。少時黙つて居て、はつと、憶出したやうに、

「貴方、貴方」

と、急しく呼立てる。

「何んだ？」

「順四郎様と氣が合つてるの何のつて、貴方は變なことを駐

く有仰いますすが、何んの譯でございます。」

「だがね、家には内々那麽相談があるんだよ。」

「那麽相談つて什麼相談でございますの。」

「其はね。」

と、有繋に謂惱んで居て、

「お前と弟と、夫婦にしやうといふ事よ。」

「何ッ。」

と、仰天して、お今は、はつたり立停つた。

「さ、万一、那麽相談があつたら何うするね。」

自由結婚

「知りません。」
 と、お今は叱るやうな口吻であつた。
 「知らんかね。は。」
 と、嘲けるやうに謂つて、空を向上げる。
 「何うせ田舎女でございますもの。」
 「田舎女？ だね、勿論さ、田舎女なのも知れどるが。」
 「ですから澤山呵めて下さいまし。」
 「誰も阿めはせんよ。」
 「阿めなさらなけあ、馬鹿になさるんで。」
 「何う致して、馬鹿にするどころか。」

自由結婚

と、四下を見廻して、
 「おい、飯でも喰つて行かう。」
 と、眼の前の松源（料理屋の名）へ入つた、飯を喰つて了つて、是から日本橋の本宅の方へ、お今を連れ行かんと、下駄に下駄を並べてさせて居る……、出會頭に、
 「あら、磯川さん。お珍しいではございませんか。」
 と、艶いた聲で言を掛ける者があつた、健三は聞かぬ真似して、出去らんとするを、くるり前へ廻つて、
 「同然磯川さんだ事よ。酷いんですね、御返事をなさらないで。」
 健三は、ふと、気が付いたやうに、狼狽して、
 「これは……、八重子さんでしたか。失禮。些ども気が付かんかつたですよ。阿母さんも御一所ですか、は、然うです。」

か。八重子と聞ふは十八九ばかりの長の娼婦とした東髪令嬢で

あつた。」

八重子は無遠慮に、

「大層お見限でございましたのね、御旅行なさいましたつて

何時お歸りになつたのですの。」

「二週間ばかり以前でしたよ。」

「あら、では餘程遅りますのね、お歸りなさいましてから。

些ども存じませんでしたの、……まあ、宜いぢやございませ

んかの、那樣にお逃げなさるもんぢや無よいこと。」

と、辯舌の爽かさ。

「否、逃げはせんのですが、連があるんですから何れ其の

間に。」

「お伴侶、おや、妹御ぢやないんですの、何方？」

「何有鳥渡。」

と、言濁らすと。

「戀女？」

是はまた、あられも無い。

「戯言ぢやありません。」

「ではございませんの。」

と、お今を尻目に懸けてゐる。お今は健三の後に小さくなつ

て居た

「お伴侶がお有んなさるんぢや、まあ仕方がございません。

那樣に申上げて反つて御迷惑だど何んだから、ね、八重」

と、八重子の母親とも見ゆる四十許の上品な奥様風の人を制し止めた。

「好いちやありませんか、阿母さん。お伴侶が
あつたつて介すけはないわ。」

「那麼暴亂な事をお謂ひだつて。」

「關はない事よ、阿母さん、他の方とは異ふん
ですもの、言いはゞ……。」

「何んだね、お前。」

と、注意されて、八重子は其と氣付いたやうに、

「爲様がない事ね。妻かみ、久しぶりだから然う言ふ
んだわ。」

折角何んだつたのに、残念ね、磯川さん。後の方御親類
の方。」

「然うです。」

「何うだか。」

と、首を傾げて、莞爾して、眼に何やら言はして、姿致すがたをす

る。

「眞箇まごころですよ、加之かへ、出てからまた直に入るのも何ん
ですか。」

「ら。」

「然うですか、では。」

と、別れんとして、八重子は蹠々たどたどと引返して、

「磯川さん、磯川さん、鳥渡。」

と、呼止めて、びつたり健三に寄添つた、お今の胸の騒ぐ事
といふものは。

「何時入らつしやいますの、明日……明後日？、で無くて何時？、では十五日に、然う、では屹度在有つしやいませよ。お待ち申して居ますから。」

と、健三の頬に其の唇の觸れんばかりにして喋舌り立て、纏て母親の後を追つて松源へ入つて了つた。其の後影を見送つて、

「何うだね、大分お轉變だらう。」
と、健三は冷笑ふやうに言つた。

「然うですね。」
と、お今は氣の無い返事をする。

「でも教育はあるのさ。彼でも華族女学校の卒業生なんだから家いものよ。」
と、何か意味があつてか、ひげらかすやうに言つた。

「立派な方なんですな。へ——。」
お今は熱と内心の不快を包んで入る。

「立派さね。まあ學問の点へ行くと、お今なんか足下へも寄りつかれな。」
「何うせね、そりや妾なんか適やしませんとも。お姫様と田舎娘とは較物にはなりやしませんわ。當然でさね。」

「然うさ、まあ然うだな。」
「何んなら彼の方を奥様になすつたら可いちやございませんか。」

「さ然うも行かんさ。」
「何有、妾お國へ歸ります。は。」

「國へ歸るッ？」
「居ればお邪魔になるのですから、實にお氣の毒ですもの。」

「やつ、慥つてるのかい。」

「慥りも致しません。妾が不束な田舎女なのでございますから。」

「おい。降参る、降参る！。うつかり彼女を讃めた私が悪かつた。」

「何が悪いものですか。お察いからお讃めなすつたのでございませう。」

「然うでも無いよ。其の代容貌はどいふと、御覽の通り二の町でね、軍配はお今の方になります。いや結構な事だ。」

「可ござんすから、澤山お慰弄なさいまし、妾の馬鹿は初めから知れて居ます。」

「有仰いますね！。大分手殿しくなつて来た。すつかり御立腹で、はよ、ッ、實に濟まんかつたね、が、疑ぐつては可か

んよ。彼女が私の何んでも無い知巴なんだから、可いかねお今。」

「變な言譯をなさるぢやありませんか。可笑しいこと。」

「でもさ。もしか疑つてるのでは無いかと思つてよ。」

「誰も疑りはしませんよ。何しろ大層お口の巧いお方ですね。」

「詰らん處に感心するぢやないか。」

「健三はふとお今の様子に氣が付いて、

「大層滅入つて居るやうだね。何うかしたのかい。」

「然う有仰る貴方こそ、驚いかに在りしやるぢやありませんか。」

「私が驚ぐものか。」

「其は然うと、今の方は何處の方。」

「お今は氣遣はしげに尋ねた。」

「お八重……、何有今の娘かい。私も能く知らんが、先方では何か頻りとお世辭を言ふのさ。」

「でも大層馴々しい御容子ぢやありませんか。何れお近しい方なんでしょう。」

と呟くやうに言つた。其の聲は微かに顫れて居た。健三は苦々しげに、

「酷く何か氣にして居るね。何んなら紹介をしても可い位なもんだ。」

「それ御覽なさい、同然能く御存知の方なんせう。」

「何んでも可いぢやないか。」

と、健三は紛らして了つて、

「おい、車夫、室町まで二臺だ。」

「總て二輛の人力車は兩人を載せて、急がしき夕暮の町を疾

風のように走つた。日はどつぷりと暮れて、願背る廣小路の方には、電燈の白光が煌々と輝き渡つて居た。

二十八

其の夜は磯川の本店に泊る事となつたが、一族は皆、お今を未來の家庭の女主人公とも思はぬのか、待遇の冷かさ。宛然石の上の座つて居るかの思であつた。健三は更めて父と母とに紹介はしたが、母親は倒の如く苦り切り、父親は愛想の好い善人のやうではあるが、其の家事萬端は母親が宰領するものと見受られた、今日の散歩と、道でちらと見た八重子の事な

と思詰めて、體は細のやうに、心も疲れて了つて、お春お花
 等と共に九時頃には臥床に着いて了つた、三四時間は我知ら
 ず寢汚くも眠つたかと思はるゝ頃、弗と目を覺して見ると、
 家族は今や臥床に就つたのか一時家内は騒々しくなつてお今が
 寢室と襖一重を隔たつた健三が居室には、女中の襟布きのふ
 る物音、健三が吠なご一々に開取れたが、聽て床に着いたの
 でもあらうか家裡は闐然して了つた。
 少時経つてから、何處からか、母親の來たものと覺しく、健
 三の枕頭には何やらひそく話聲が聞出た。
 お今は思はず聞耳を立てる。
 「お前ね、何うかして其の邊を巧く本人に言合めて與るが可
 いよ、何もね、呼よせたらからと言つて、そりやね、必ず女
 房にしなくつちやならないと言ふ理屈も無からうらやない

か。「其は然うだがね。」
 と、口を騫れたのは健三である、煙管を叩く音が牙はて聞
 た。
 「其は、まあ此方から呼寄せたのには異ないが、お前には双
 親のついで居る事は本人も承知だらうし、親が縁に貰へな
 いと言切つて了へば其限の話さね、然うすりや此方から口
 を利いて與つて相當の亭主を有たす迄の事さ。國の噂ぢや
 何んでも大變に頼四郎と氣が合つてると言つてるけど、登
 兄のものを弟に譲るといふ譯には行くまいからね、まあ其
 は別としてお前の方は兎に角斷つて與つた方が可いよね
 然うお爲なさる。」
 健三は吠を生咬にして、さも懊惱さうに、

「那樣に亂暴を言つたつて爲様がな。折角呼寄せたから來たのに那樣慘酷な事は出來んよ。人間の爲る事ぢやないよ。」

只六

「お前はよく、お今様に眼が無いんだね。困るぢやないか。那樣田舎女を妻に据ゑて、夫の福が利さすか、馬鹿々々しい、女は推が強いばかりでも可くないし、縁致が可ばかりでも可けません。……お前問かない振で寢ては可厭だよ。今日八重子様に會つたとお言ひだつたぢやないか、何方が好いか鳥渡引較べたつて解りさう事ぢやないか。」
「勸工場の商品物ぢやあるまいし、女房に素見なんて言ふ事が出來るものか。」
「其だから尙更大切だらうぢやないか。」
「何故?」

「何故つて八重子さんだつてね、貰つて與れるものだと思つて九分迄は決めて有在つしやるのに、今更突放すのもお可哀想な……。」

「ではお今の方は可哀想ぢやないのか。」

「何んだつてね?」

「でも阿母さんの論法に依ると、然うどし加鑑定出來ないね。馬鹿な事をお言ひでない!、然うではないがね、八重子さんを貰つて御覽、はらお春を熊本の兄さんの方へ上げるといふ事にすりや誠に似合の夫婦さ、其から、まあ、お聞きよ。」

と、語調を更めて、

「家の商賣だつて、自然に這塵になつたのではありません。始めは八重子さんの阿父さんが、引立て、宮内省の方へも

種々口を利いて下すつたものだから、一時にはつと擴つたのぢやないか。其の思だけでも我儘は言へないわ。況して八重子さんなら何處へ押出したからつて立派な女さ、尋常なら願つても無い縁と言はなければなりません。」

「噓しい、阿母さん最うお寝みなさい、私も眠むたい。次の室にはお今が寝て居るぢやありませんか。」

と有聲に母親の面色は變つた。

小説 自由結婚前編 (終)

明治三十五年八月九日印刷
 明治三十五年八月十三日發行

小説 自由結婚
 定價金四十錢

著者 三島才二

發行者 大淵涉

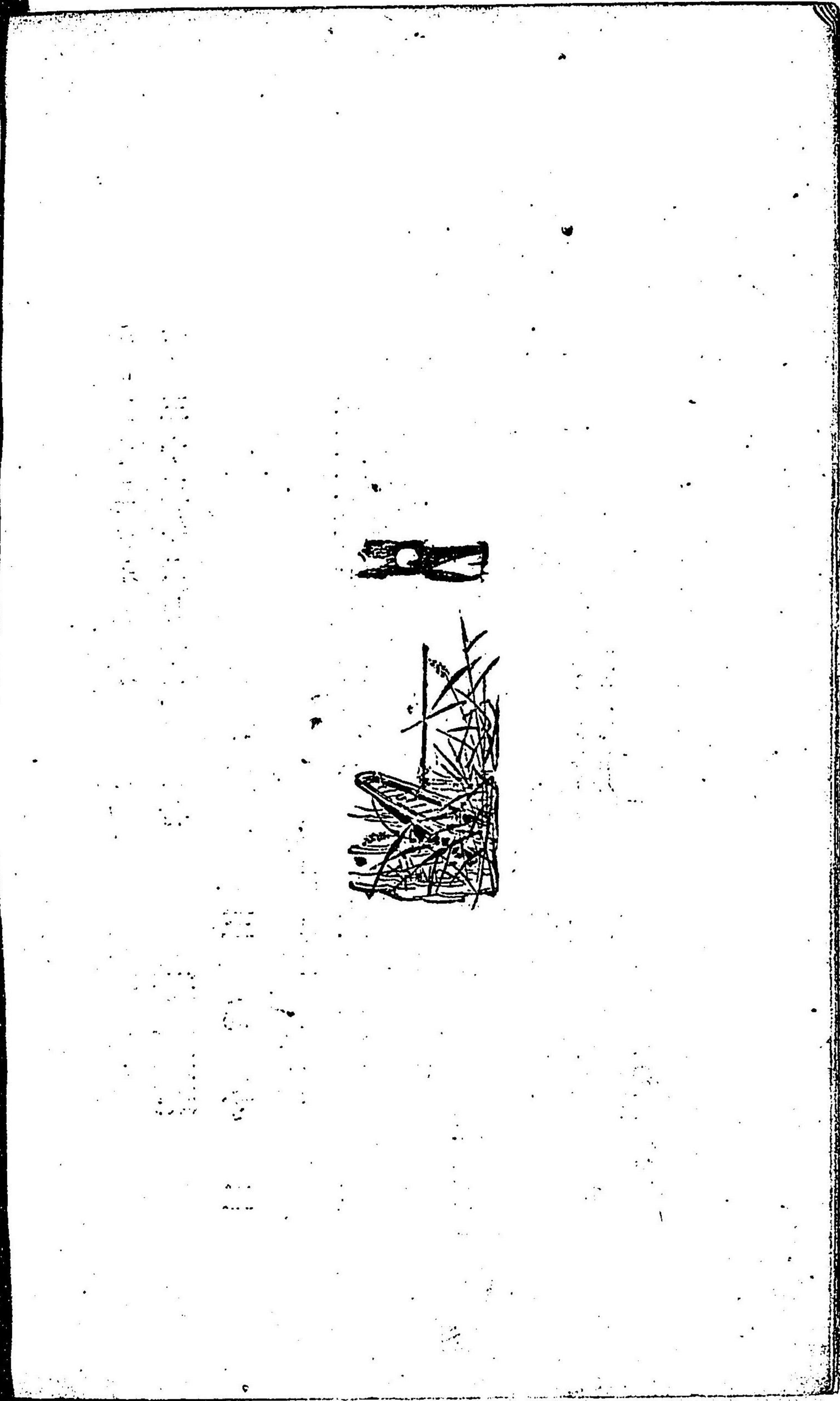
印刷者 礪波伊三郎

大阪市南區末吉橋通、四丁目八十六番屋敷

發行所 駸々堂

大阪市南區心齋橋北詰 (電話東千〇七十一番)





欠

MISSING



女界

定價
卅五錢
郵稅
六錢



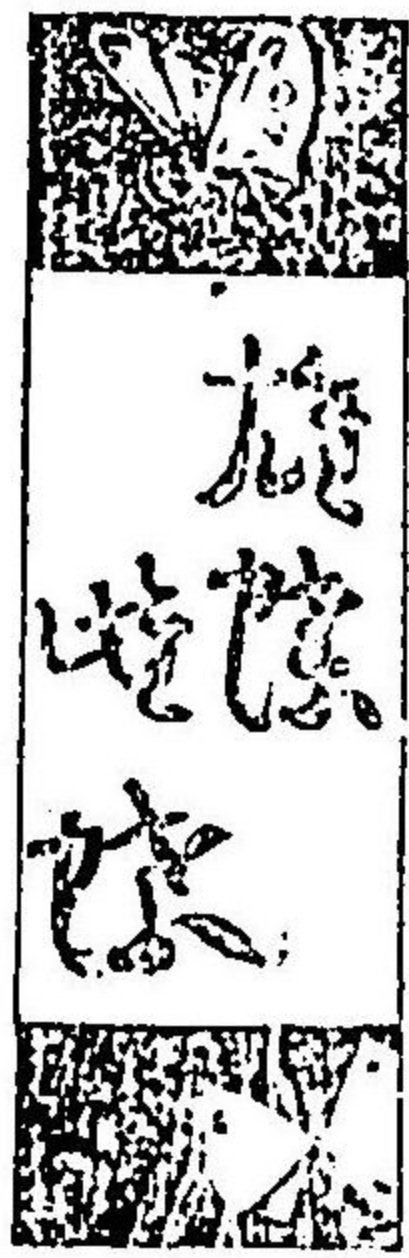
新聞

定價
四拾錢
郵稅
六錢



美文

定價
卅五錢
郵稅
六錢



蘭庭

定價
卅五錢
郵稅
六錢



記書

定價
參拾五錢
郵稅
六錢



大明報

定價參拾五錢 郵稅六錢